大地震から命を守る自主防災活動各論

☛実践的『互近助防災』のススメ

序章　Ⅰ～Ⅵ

１章　自治会自主防災活動の時間帯別段階

２章　自主防災組織の作り方

３章　自主防災活動各論

４章　相互支援と弱者支援

５章　避難所での災害関連死ゼロ

６章　被災時被害ミニマム化の原則と姿勢

７章　兵庫県報告書にみる５つの提言

参考Ⅰ～参考Ⅲ

添付資料　５種

2022 年 4 月

横浜市旭区南笹野台自治会

減災センター副センター長

防災塾・だるま　会員

稲垣　博正

初めに

災害対策では一般的に「自助」「共助」「公助」の３種の対策を満遍なく記述することが求められます。

その中で最重要テーマは何かと問われれば、私は迷わず被災時に一人でも多く『人の命を救う』事だと答えます。

この冊子は、『命を守る・救う』為に何をすべきかの観点で記述されており、一般的な防災本で語られる「炊き出し訓練」や「避難所開設訓練」には触れていません。

本冊子では、「命を守る・救う」観点で、自分の命を守る「自助」の重要性と近所の「人の命を救う」為の**『互近助防災』**の意義を強調しています。

互近助防災とは？

地震災害では被災後１時間以内が、「**命を守る・救う**」防災活動の勝負の時間です。

①防災システム研究所　**山村武彦氏**が提唱した言葉が**「互近助」**

②QQ 防災クラブ　**原田剛氏**の提唱する**「近隣共助」**も同じです

参考文献：**震度７　何が生死を分けたの か**　（ｋｋベストセラーズ）

「自分の命を守る」自助と「街を守る」共助・公助の隙間に、「隣近所の人の命を救う」領域があり、隣近所で「お互いに助け合い」「近くの人の命を救う」互近助防災こそが『命を守る』防災の原点であることを強調しています。

大地震から命を守る：自主防災活動各論 ☛『互近助防災のススメ』

序章　Ⅰ・災害形態別「被災死ゼロ」のポイント
Ⅱ・災害死ゼロ：自助と互近助が命を守る
Ⅲ・地震地域で「命を守り、命を助ける」タイムライン
Ⅳ・何時でも何処でも大地震は起きる
Ⅴ・首都直下地震の想定被害
Ⅵ・奇跡と悲劇：何を学ぶ(大地震)

1章　自治会自主防災活動の被災後時間帯別3段階
2章　自主防災組織の作り方
２章ーⅠ 事前準備（自助）：命と家を守る4点セット
1・耐震化
２・家具固定
３・感震ブレーカ
ーⅡ事前準備（共助):自主防災組織の立ち上げ
１・組織作り
２・仕組み作り
３・防災訓練の構想作り

3章　自主防災活動各論
3章ーⅠ・安否確認
ーⅡ・初期消火
ーⅢ・救出と救護
ーⅣ・避難と誘導
4章　相互支援と弱者支援
5章　避難所での災害関連死
6章　被災時被害ミニマム化も原則と姿勢
7章　兵庫県報告書にみる5つ提言
参考ーⅠ　神戸震災から学ぶ①～②
ーⅡ　スーパー火災に備える①～④
ーⅢ　奇跡と悲劇―その分岐点に学ぶ

巻末に『添付資料　５種

この冊子は、ここに挙げた目次に沿って記述されていますが、大部分の内容は筆者が自分の住む自治会で実践しているものをベースに書かれています。

私の自治会で実際に使っている「規約・マニュアル・アンケート」も添付したので、参考にして下さい。☛巻末の「５種の添付資料」に掲載しています、

さらに取り扱う災害形態も、筆者の住む横浜の高台の戸建て住宅街区を前提にして「マンション防災」「津波・洪水･崖崩れ」等には触れず、**「地震」に特化**して書かれている事に留意してお読みください。

序章－Ⅰ．災害形態別「被災死ゼロ」のポイント

地震＝突然
【予測不能・突発的に被災】
①事前準備で被害最小化が可能・・・・・・・
☛自助：耐震家屋/家具固定/感震ブレーカ/消火器
☛共助：自治会に自主防災組織を作り訓練・・・
②発生後1時間に共助の「救助と消火」で被災死ゼロ化に挑戦＝公助が来る前に共助で助ける
③要支援者救済を主眼に絆と助け合いの町作り

津波＝到着まで若干の時間
【地震直後の津波警報後に到着】
①津波到着時間と自分の逃げ能力で「個人別逃げ場」を町内地図上に記載☛オーダメイド避難
②ハザードマップと町内地図を元に逃げ訓練で「個人別逃げ場」への避難の可能性確認・・
③逃げ足の遅い人への誘い合いと支援対応者を設定&「逃げ場」の探索・設定☚自治会/自治体

洪水・水害＝予測可能
【数日前の予報、当日の警報後】
①予報と警報を元に自治会で避難方針を審議
・タイムラインの時間帯別行動の意味を共有
・避難行動開始のスイッチを共有：水位/目視
②個人別にレベル毎の「逃げ場」を決めておく
③レベル３：高齢者等 、レベル４：全員避難
④早く「逃げるは恥でなく命を救う」！！・・

土石流・崖崩れ＝予兆あり
【累積雨量/地盤の緩みで発生】
①大雨or長雨の累積降雨量と地盤の緩み/揺れ
☛前線と台風、線状降雨、長雨後の地震・・・
②地元の危険スイッチの設定、共有と監視・・
③気づいた時は遅い!! ☛早めの避難は勲章!!・
当該地区自治会は「まずは逃げよう」を啓発
☛葉山町は「事前避難に宿泊補助金」支給

被災死ゼロ＝「命を守り・命を救う」為の防災対応・対策は、災害形態別にその重点は異なっている。

『地震』では、予告無しで突然襲ってくることから、**自助・互近助**・共助での防災「事前準備」の良し悪しが「被災死ゼロ」の成否を決するといっても過言でない。

「命を救う」観点では、被災後１時間の互近助防災の重要性を強調しています。

自助での「耐震家屋・家具の固定・感震ブレーカ・消火器」の４点セットと互近助・共助での「自主防災隊の組成と訓練」が「事前準備」の最重要テーマとなる。

『津波』では、津波到着時間内に「個人別の逃げ能力」で何処まで逃げられるか？自分の逃げ可能距離内に「逃げ場」があるか? その逃げ場まで所定時間で行けるかを定義した『オーダーメイド避難計画』を事前に作っておくことが最重要テーマになる。

津波での避難可能距離の求め方と盲点

＊避難可能距離＝歩行避難能力Ｘ（津波到着時間―避難準備時間）

歩行避難能力：分速歩行距離(30m～50m)☚のぼり坂道と様子見歩行でこの 70%か？

避難準備時間：津波警報後に避難**準備事時間として５～10 分**を見る必要がある。

一般的なタイムライン策定でこの準備時間を加味していないケースが多い☚注意!!!!

自治体が指定する避難所だけでなく、近くの避難タワー、3～5 階建て以上のビル、高台の公園…自分の逃げ能力の範囲にどれだけ**「逃げ場」を見つけ**自分だけの「オーダーメイド避難計画=避難タイムライン」を持てるか、が命を守るポイントになる。逃げ場は、日ごろから何カ所かを想定して**「逃げ訓練」**をしておきましょう

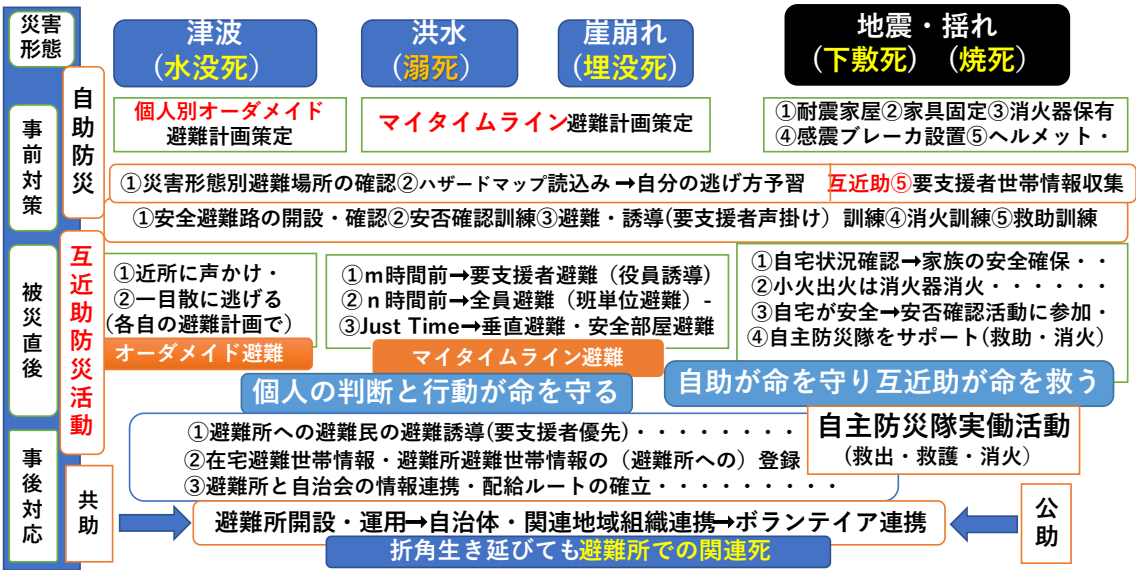
『洪水』では、数日前に出る予報と当日発令の警報で、各人が事前に作っている「マイタイムライン」に従って所定の「逃げ場」に避難できるかがポイントになる。

洪水は時間的に余裕があるので、**「隣近所での誘い合い」が重要**で、「逃げ」のタイミングも、レベル３で高齢者等避難、レベル４で全員避難、ジャストインタイムでは「垂直避難」として『逃げるは恥でなく命を救う』を合言葉にここでも「早めの避難」を心がけよう。**早目の避難での空振りは「素振り」として讃え合える空気**を作ろう。

『崖崩れ・土砂災害』では、前日までの累積雨量や地震の揺れで起きる「予兆」をどう読むか、そのうえで地域・個人別に「逃げスイッチ」として何を観察するかを事前準備として決めておく必要がある。「**逃げスイッチ**」が観察されたら、「空振り」覚悟で**「早めに避難」することが『命を守る』最重要ポイント**となる。

自治体の出す警報より**自分たちの判断を優先**するくらいのリスク感応度が必要です。

序章-II,『被災死ゼロ』＝自助と互近助が命を守る



この章では、被災時に「被災死ゼロ=命を守る」為に、縦軸に「事前対策」「被災直後」「事後対応」の時系列を、横軸に「災害形態」を置き、マトリクス的に「自助」「互近助」「共助」「公助」で何をすべきかを１枚で表現しました。

特に「**地震**」では自助と自主防災の重要性を、「**洪水・崖崩れ**」では「マイタイムライン避難計画」を、「**津波**」では「個人別オーダーメイド避難計画」の重要性をアピールしました。

突然の津波警報が出た時に人はどう動けるか？を実体験した防災のプロ（高知大学原忠教授）の生の声を紹介します。皆さんは下記の事実から何を学びますか?

令和 4 年 1 月 16 日未明(トンガ火山爆発時)　場所：出張先・宮古のホテル

①00 分☛突然の防災無線サイレンで飛び起きる

②着替え、懐中電灯、持ち出し品準備完了⇒**15 分後**に避難開始

③暗闇の坂道を歩き避難先を探しながら避難⇒**25 分後**に高台に到着

皆さん、②の「**避難準備時間**」を見ないで、避難計画を作っていませんか？

防災のプロでも**突然の警報**で**土地勘なく**、**準備無し**ではこれが実態

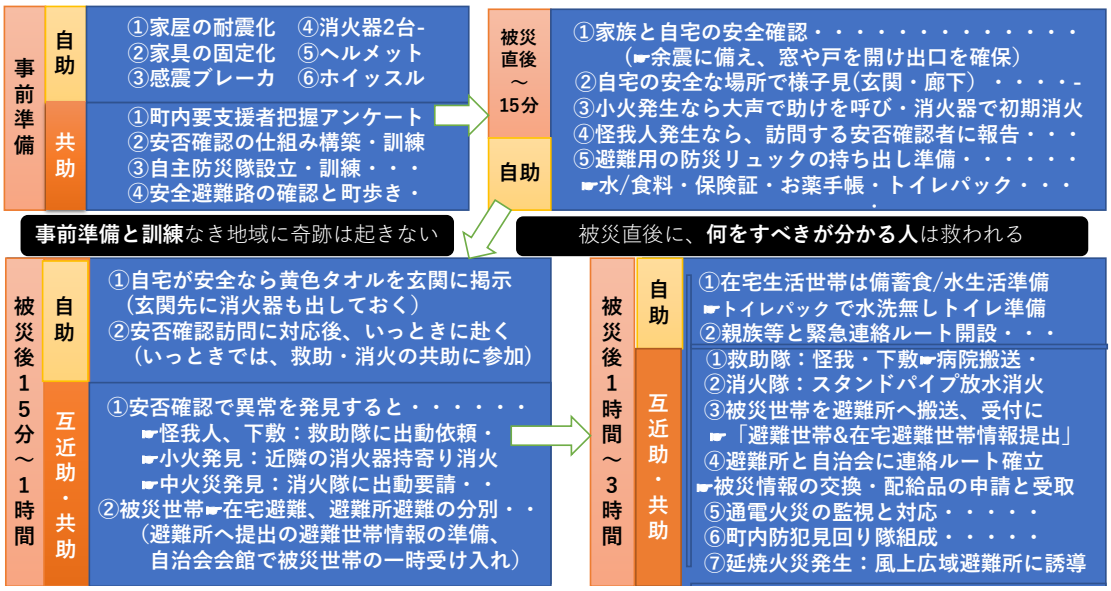
さらに、避難所における「災害関連死」についても言及しておきました。

災害関連死ゼロ化は、被害が①高齢者・基礎疾患者に集中、②入所後初期から、③疲労とストレスで発生する事に着目した対応を避難所で出来るかにかかっています。

「災害関連死ゼロ」を目指すなら、**高齢者と基礎疾患者対応に特化した避難所運営**を本気に取り組むしかない(COVID-19 で被害は弱者に集中を再確認しましたね)。

もう一つ避難所での関連死の盲点に、避難所間の避難民の移動時の「疲労死」がある。水没や崖崩れ危険区域に避難所はないか? 定員オーバー時のセカンド避難所は安全場所に設定されているか？　住民は平時から点検しておく目を持とう

序章-Ⅲ．地震地域の「命を守り・命を助ける」タイムライン



一般的に「タイムライン」は「津波・洪水・崖崩れ」対策で策定され、「地震」にはなじまないと言われています。

「地震」においても、「事前対策」、被災直後からの「時間帯別の対策」を定義し、住民間で「知識と行動」を共有しておくことの重要性を述べ、「地震のタイムライン」の意義と必要性を強調しています。**地震では被災後 1 時間内で何が出来るか**が勝負です。

下図に、地震タイムラインの自己チェックシートを提示しているので、皆さんの地域に合わせてカスタマイズして「被災死ゼロ」を目指して活用して下さい。

地震災害 Timeline	住民の行動　自助=My・Timeline 下記の□に、どこまで出来ているかを自己チェックしてみよう	互近助=Our・Timeline☛共助=Community・Timeline 自治会の行動
事前 準備	□耐震家屋に住む　□家具を固定化 □感震ブレーカ設置　□消火器2台保有 □5日分の備蓄(食料・水・トイレパック) □避難所までの安全路確認街歩き	□町の災害リスクを住民に啓発・徹底(下敷き怪我、火災) □町内に自主防災隊を組成　□防災備品の購入整備 □年１回の防災ｱﾝｹｰﾄ(世帯状況、**要支援情報**、自助準備) □毎年の防災・安否確認訓練実施(要支援者優先訪問)
直後 ～2分	□自宅で身の安全確保 □脱出経路確保（ドア、玄関、窓）	**直後～15分は** **自治会・減災センター役員・実働隊も、** **自宅でMy・Timelineを実施する・・・**
2分 ～5分	□ガス元栓閉　□ブレーカ断を確認 □安全スペース（廊下・玄関)で様子見	
5分 ～15分	□災害情報入手□非常持出品準備 □自宅出火☛消火器消火(火事だ~大声で) □安全タオルを門扉に□消火器を玄関前へ	**自宅が安全なら**
15分 ～30分	□安否確認訪問者に自宅の状況報告 □異常発生は大声(ﾎｲｯｽﾙ)で助けを求める □安全なら「いっとき」に集結☛情報収集	□減災センター/いっとき避難場所の立ち上げ □安否確認隊は班内(10～20戸）全戸訪問（**要支援者優先**） □実働隊(消火・救出・救護)は機材準備/出動待機
30分 ～1時間	□ｾﾝﾀからの要請で、いっときリーダの指示で異常発生現場に赴き、実働隊活動を支援 □災害伝言板（１７１）に安否登録	□近隣小火発見：近隣消火器持寄りで初期消火活動 □異常発生：現場とセンターでﾄﾗﾝｼｰﾊﾞ通信して実働隊を現場に派遣☛消火・救出・救護☛人的被害ゼロ！！！
1時間 以降	自治会 □町内被災状況の整理/今後の方針審議　□怪我人の病院搬送　□減災本部に防災トイレ開設・・・・ □延焼火災：風上の広域避難場所に誘導(自治会では2カ所以上を設定)　□避難所とﾎｯﾄﾗｲﾝ開設・・ □家屋崩落世帯：避難所へ避難世帯を誘導&在宅避難世帯を登録☛要支援特記を含む世帯情報携帯要	

序章-Ⅳ．何時でも何処でも大地震は起きる!

1．日本の地学上の特徴=地震大国ニッポン

①４個のプレート上に乗っかる不安定地盤

「北米」「太平洋」「フィリッピン」「ユーラシア」

②日本中に散在する2,000個の活断層

☛「いつでも」「どこでも」大地震!!☛『明日は我が町に！!』

2．震度７の地震は何処で

①北海道☛2018年胆振地震
②東北☛2011年東日本地震
③関東☛1923年関東大地震
④東海☛1944年東南海地震、1945年三河地震
⑤北陸☛2004年中越地震
⑥関西☛1995年阪神淡路地震
⑦九州☛2016年熊本地震

しかも場所の予測は不可能

北海道～九州まで

万遍なく大地震が発生している！。

次は☛首都直下？南海トラフ？

ココでは、日本の地学上の特徴（４枚のプレート）と震度７の地震が過去北海道から九州まで「どこでも」おきていることを示しました。

最近でも、震度５以上の地震が首都近郊でも起きています。2021 年に「茨城南部」「千葉北西」「千葉南部」「足立区」、2020 年に「茨城沖」「伊豆地方」「茨城沖」「伊豆近海」「千葉東方」で震度５以上の地震が発生しました。明日は横浜かも！！！

序章-Ⅴ．首都直下地震の想定被害（東京都）

首都直下地震の想定被害（東京都）・・・内閣府発表（冬、18時、風速8m）

建物被害－全壊・焼失家屋：６１万棟

死者：2万3千人
（うち、焼死者：1万６千人）

負傷者：１４.７万人
（揺れ：１３万人、火災：１万7千人）

要救助者：7万２千人（自力脱出不能）

帰宅困難者：５１７万人

＊＊南笹野台自治会では「こども110番」世帯で、帰宅困難世帯で孤立した学童を緊急預かりする制度を作っている。☛「こども110番」の防災適用!!!

左記被害が30年以内に
７０％の確率で発生・

自主防災での重点防災活動
①揺れで下敷きの被災者救出
（要救助者の早期発見と救出）
②発生火災の初期消火・・・
③帰宅困難世帯の児童預り・
（こども110番）

内閣府が公表している被害想定です。「冬、18 時、風速 8m」の条件で試算したもので条件が変われば、その被害想定も変わってきます。

(関東大震災は 13m、阪神淡路震災は３mの風速でした)

ココでは東日本大震災や阪神淡路震災と異なり、首都直下では「**火災被害**の多さ」と「500 万人を超える**帰宅困難者**」「20 万人以上の**負傷者･要救助者**」に着目して、我々の防災対策を考えておく必要がある事を伝えておきます。

おそらく、過去の大地震も「想定外」の被害を出しているので、**被害規模はこの数倍もありうる**と思って準備をしておく必要があります。

(首都直下地震では、昼間で高層ビルに多数の人がいて、満員電車が動いていて、風の強い時なら、被災死 100 万人と警告する人もいる)

巻末の「参考―Ⅱ　スーパー火災に備える」に記載している横浜市の発表している元禄型地震の火災発生予測は、「冬、平日、晴れ、18 時、北の風 6m」の条件で

・焼失家屋：7,800 棟　・焼死者 1,600 人　・クラスター発生：中区と神奈川区

と発表していますが、甘い予測と考えて住民は日頃からの準備を進めましょう。

序章-Ⅵ．奇跡と悲劇：何を学ぶか？

大地震・瓦礫下敷き被害で命を救ったのは？

場所	長野・白馬村堀の内地区	阪神淡路(特に神戸地区)
何時	2014年11月長野北部地震	1995年1月阪神淡路地震
結果	11人が崩落下敷き・全員無事救出	被災1時間で2116人の下敷圧迫死
何が?	①被災で４８軒全半壊、下敷被害１１人発生 ②近隣住民が、安否確認後被害現場に急行し チェーンソーとジャッキで全員救出・・ （消防が来る前に被害者全員を救出） ◎４年前から「災害時住民支え合いマップ」 ・要支援者に赤〇、支援者に青〇印 ◎区（８世帯):組長と２人の伍長➔全ての活動単位➔村内清掃、お祭り、安否訓練➔絆の源	①全体犠牲者6434人死亡：被災後1時間が勝負 ②初日で5036人死亡のうち1時間以内に3842 ③3842人の内2116人は瓦礫下敷き圧迫窒息死 ④下敷き犠牲者の救出は誰が？・・・・・・・ 家族と近所：９０％　消防・自衛隊：５%以下 ⑤1時間後～のリスクは火災：6割は通電火災!! ⑥この経験➔耐震家屋、家具固定、自主防災、感震ブレーカ等の言葉が日常語化した・・
学び	①隣近所(区)の付き合=絆が防災の基本・・ ②消防到着は１時間後：直後の救出は地域で ③絆+支えあいマップ+訓練が奇跡を起こした	①大地震では、被災後1時間が人的被害ゼロ化の最大勝負➔地域として何が出来るか? ②消防等の公助はこの時間帯では間に合わない
提言	①被災直後の救助は地域力が必須➔自分の・街は自分で守る➔仕組みと訓練が必要 ②救出は二次災害防止のため２人/組以上で・	③自分の命と町は自分たちで守る➔・・・・・ 自助：耐震家屋・家具固定・感震ブレーカ 共助：安否確認・自主防災隊・訓練・・・

過去の経験から何を学び、今後の対策に何を活かすかは、防災のイロハである。

ココでは、大地震・瓦礫下敷き被害で「命を救った」のは? の観点で二つの事例を検証してみます。2014 年の長野白馬村の「奇跡」と 1995 年阪神淡路の神戸地区の「悲劇」を比較検証して、「奇跡と悲劇の分岐点は何か?」を探ってみました。

筆者は、以前に「奇跡と悲劇事例集」をまとめたことがあります。　その中で「福祉施設：川越キングスガーデン vs 球磨村千寿園」「岡山小田川流域：総社下里 vs 倉敷真備」「学校：鵜住居小中学校vs 大川小学校」「広島土石流：洋国団地vs 大原ハイツ」等の被害状況と災害対応を比較検証し**「被災死ゼロ」達成の「奇跡の秘密」**を探りました。

（「参考―Ⅲ　奇跡と悲劇―その分岐点に学ぶ」を添付しました。参考にして下さい。）

いずれの事例にも共通してみられる「奇跡のポイント」は、以下の５点です。

①自分の町の**災害リスクを定義し住民間で意識の共有化**ができている町

②日頃から各種イベント等で**一体感と絆を醸成している町**

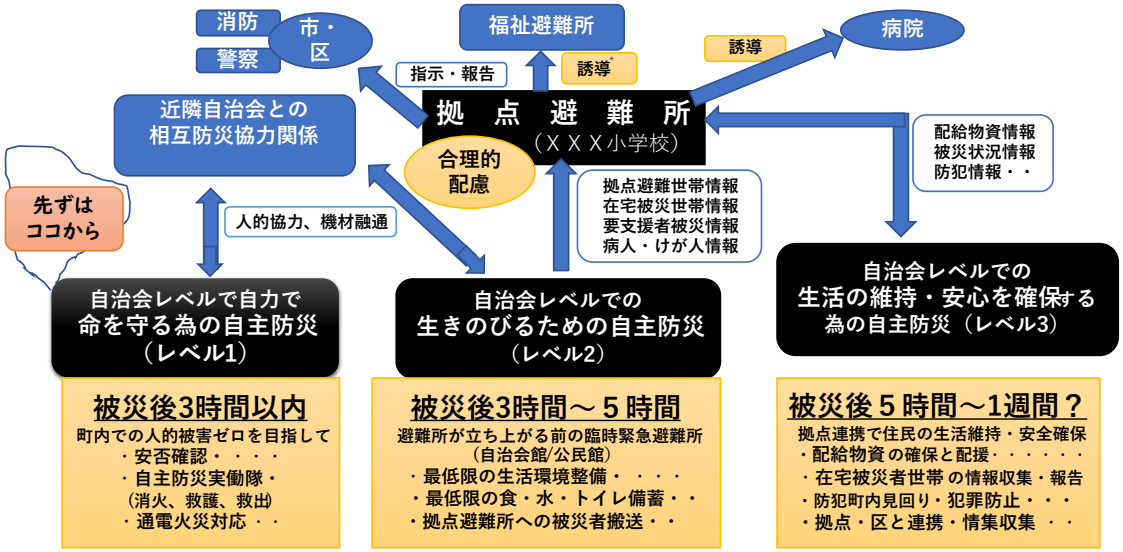
③**自主防災組織**の存在する町

④継続した**実践的防災訓練**ができている町

⑤**災害弱者の存在認識と弱者に優しい**町

みなさんの自治会でも、上記の５点が出来ているか点検してみましょう。

1章　自治会自主防災活動の 被災後 時間帯別3段階



自主防災組織を、いきなり完成形を目指して立ち上げるのは難しいものがあります。地震災害で被害は被災後3時間（特に１時間）以内に集中します。ならば**自主防災も被災後１時間以内に何をすべきか**の観点で立ち上げる事をお勧めします。この時間帯こそが「**互近助防災**」の出番です。

最初にやるべきは「**安否確認**」です。安否確認で異常を発見したら「怪我人の救出・救護」で命を救います。火事を発見したら「初期消火」に努めます。これを可能とする自主防災活動が「**第一ステップ**」です。この間は、消防も警察も自衛隊も来てくれません。まさに、**自分の命は自分で守り、自分の町は自分達で守る**覚悟と、それが出来る体制と仕組みが必要です。これが出来ていないのに「炊き出し」訓練はナンセンスです。

「**第二ステップ**」は、被災で家に住めなくなった世帯が**避難所開設までの一時的な生活を送れる「避難生活エリア」の提供**です。その為に自治会館等に「寝具」「非常食」「トイレパック」等の最低限の備蓄をしておきます。被災後 3 時間以降に立ち上げ 2～3 泊の短期生活の提供です。**第一・第二ステップで、避難所に行く前に亡くなる人をゼロ**にします。

「**第三ステップ**」は、地域避難所の立ち上がり後の対応です。一時避難生活者を避難所に誘導・搬送し、**避難所と自治会の間で「情報と配給品」のやりとりが出来る体制の構築**です。

このステップでは、避難所とのやり取り以外に、**自治会エリアの防犯見回り**での犯罪防止も重要テーマとなります。

ステップごとに、やるべきこと、必要な体制と装備が異なるので、**地道にステップを踏んで**自主防災を進めるべきです。私の自治会でも、第一ステップ構築に 3 年、第二ステップ着手は 5 年目からと時間がかかっています。第三ステップはこれから着手というレベルです。

2 章　自主防災組織の作り方

2章ーⅠ.事前準備(自助)：「命」と「家」を守る4点セット

1．自宅建物の耐震化
①１９８１年基準に準拠しない場合は、耐震補強工事が必要ー>耐力壁追加！！
②２０００年新基準(構造強化、地盤基準)も考慮・点検も。
⇒熊本地震・益城町：297軒倒壊(旧基準=70%、新基準＝２５%)
(倒壊家屋集中地区で2000年基準の家屋も倒壊⇒『表層地盤』が注目された!

2．家具の固定化と配置
①ストッパー式、マット式、ポール式、L字金具式を使い分けて家具固定化
②ＴＶ、テーブル、冷蔵庫、洗濯機のすっ飛び対策は見逃し勝ち
③電源ケーブルのタコ足配線は、震災時ケーブル破損・通電火災の元
④部屋の出入り口に家具は置かない、寝室にも家具は置かない。
⑤廊下・玄関は安全な場所、そこに家具・置物は置かない。

3．感震ブレーカーの設置：自宅出火防止と隣家延焼の元にならない為に！！
①震災火災原因の６５%は通電火災。揺れでブレーカ自動断の感震ブレーカ必須！

4．消火器保有
①１階、２階に夫々保有ー>一家に２台が標準
②賞味期限は８年だが、１０年は大丈夫。

◎食料・水は10日分備蓄が必須・・
◎トイレパックの10日分も必須・・
◎助けを求めるホイッスルも必須・
◎暗闇対策の懐中電灯も必須アイテム

防災対策の第一歩は事前準備としての「自助」です。ここでは必須の 4 点セットをあげておきます。自分の命と自宅は自助 4 点セットで守りましょう。

①**家屋の耐震化**:2000 年耐震基準でも崩落した家があった熊本地震の検証から、「表層地盤」の強度が注目されています。上物としての家屋は大丈夫でも、表層地盤が柔らかいと地震の揺れが倍加して、崩れやすくなることの発見です。**「耐力壁」の追加・入れ替え**で比較的安価に耐震強度を 1.2～2.0 倍に出来るので検討してみましょう。
都立大学で安価な**「木造補強壁」**を研究中で注目されている。

☛NHK スペシャルで　2017 年 4 月 9 日と 2022 年 1 月 17 日と 3 月 12 日の 3 回に渡り「建物の耐震化・表層地盤」が取り上げられています。アーカイブで見て下さい。

意外と知らない耐震化の盲点

①個人宅は 85%以上の耐震化、but **表層地盤対策は殆ど出来ていない**☛「耐力壁」・・・・・
②コストが膨大で**ビルの耐震化殆ど手付かず**☚**旧耐震ビルの耐震化率は調査できていない**
☛**平日日中**に大地震が起きると**ビル内被災死が大量発生！！**(神戸は早朝でビル内は無人)

②**家具の固定**:在室率の高い「寝室」「リビング」には、高い家具は置かない、置いていても固定化することは、即実行してください。

③**感震ブレーカの設置**:地震災害での出火原因の 60%以上は、通電火災です。被災後に自動的にブレーカを落とす「感震ブレーカ」を設置しよう。

④**消火器保有**:一家に 2 台の消火器保有を勧めます。1 階と 2 階に置いておこう。

2章-Ⅱ　事前準備（互近助・共助）：自主防災組織の立ち上げ

1.組織作り　　地区防災計画とは?：　鍵屋教授、矢守教授、防災士会のビデオ3種を見てみよう

①自治会との関係　　（地区防災計画は身近な自治会・町内会単位で!！）

・1年交代の自治会役員が、そのまま自主防災役員を兼務すると防災活動の継続性と活性化に失敗するケースが散見される。
・自治会の組織の中に、独立した自主防災組織を立ち上げ、継続性とスキルの定着で地域防災力を向上させる。
・その時、留意すべきは、自治会会長と会計担当は、自主防災組織に参加し、自治会の活動との融合、資金の融通を可能とする。

②防災隊役員構成

・防災隊トップは自治会長が兼務する。これが自主防災隊を有効に稼働させ町内に定着させる為の重要ポイントになる。
・配下にーー「安否確認情報隊」、「消火班・救出班・救護班の実働隊」、「通信隊」、「誘導隊」で自主防災隊を構成する。
・安否確認情報隊は、班(10～15軒)単位に情報班員を設定する。短時間に異常を発見し、実働隊の出動を要請する
・通信隊は、被災時に本部と各隊とのリアル通信と避難所との通信ができるように、日ごろの訓練を主導する。
　被災時は、日ごろの訓練を経験した各隊員がﾄﾗﾝｼｰﾊﾞを使ってリアルタイム通信を行う。
・誘導隊は、避難所や病院への災害弱者やけが人の搬送を行うため、情報隊や実働隊から適宜編成する。

③役員規約

・自主防災隊役員は、練度が求められるので原則3年任期とする(自治会役員は1年任期が一般的)。
・自主防災役員・隊員は、自治会役員との兼務は歓迎するが、　地域防災拠点役員との兼務は原則禁止する（町内防災優先)。
・隊員の在宅比率から、退職者と主婦が望ましいが、世代間継続性を考慮して勤務者にも就任を要請する。
　(退職者・主婦の在宅率は８０％、勤務者の在宅率は６０％ーーー夜は全員在宅＝在宅率５０％)

④行動マニュアル

・震度5強以上で、在宅隊員は全員出動。隊ごとの役員被災時行動の原則をマニュアル に定める。
・被災時の住民の防災行動の原則もマニュアル化 しておく。

一般的に自主防災組織の頓挫や形骸化は、自主防災役員が自治会の１年交代役員と兼務し、理念とスキルの継続が出来ていないケースにあることが多い。

防災スキルの継承を考えると、**自主防災役員は複数年(出来れば３年)任期**であることを就任条件にすべきである。かつ、平日日中に動ける**主婦と退職者を中核に組成**出来れば良い。

尚且つ、自治会防災役員は**地域防災拠点(避難所)役員との兼務は避ける**ことを留意したほうが良い。自治会自主防災隊役員が避難所役員を兼務すると、被災時にどっちつかずになり双方の活動が停滞する事になる(多くの地域でこの絵に描いた餅状態が見られる)。

組織化する隊は①**安否確認隊**、②**救出隊**、③**救護隊**、④**消火隊**から始めると良い。

この基本組織が出来れば、⑤避難誘導隊、⑥一時避難生活サポート隊、⑦町内防犯隊等を拡充していけば良い。

自主防災隊の組織化にあたっては、①役員就任規約、　②役員行動マニュアル　と同時に③被災時住民の行動マニュアルも作っておくと良い。

これらの規約、マニュアル類は、筆者の自治会で使っている生の現物を「添付資料」として巻末に紹介していますので、参考にして自分の町にあわせてカスタマイズして活用して下さい。

2章-Ⅲ．仕組み作り

①.町内を知る：知識でなく実態に即した活動 を!

・自分の街の、災害リスクを定義するーーー地震？　洪水?　津波？　崖崩れ?　火事？
（自分の地域の防災リスクに特化した防災：高台の住宅街に津波と洪水はない）

・町内の世帯構成と災害弱者存在を知るアンケートの実施ーー『世帯カード』の毎年収集
（『災害弱者存在マップ（リスト)』の作成と安否確認での活用）

・住民の防災準備状況の把握ーーー自助の準備状況アンケートの実施
（家具固定? 感震ブレーカ保有? 消火器保有? 備蓄状況? トイレパック保有?・・・・）

・町内の防災リスクの存在把握ーー「防災街歩き」と『安全避難路マップ』の作成
（瓦屋根、ブロック塀、トランス搭載電柱、頭上の看板、道路脇の崖、水没危険道路）

➡自分の町にフィットした「地区防災計画(自治会・町内会レベル）を作って見よう

②.町内の意識合わせ：防災もまち作りー防災活動を孤立させるな！

・町内防災勉強会、研修会の開催ーー講師、研修素材、参加型のワークショップ

・町内イベントと防災の融合と共催ーーお祭り、バザー、町内清掃、餅つき、運動会
防災展示とグッズ販売、、防災クイズとゲーム、ﾄﾗﾝｼｰﾊﾞ遊び、・・・・

・町内団体との融合行事開催・・・・子供会、老人会、婦人会、趣味の会、PTA、・・・
EX：防犯目的の「子ども110番」を、帰宅困難世帯の児童を預かる「防災」にも転用

自主防災隊を自治会内に作るにあたって、筆者の体験から 2 点について述べます。

(1) 町内を知る

①自分の住む**町の災害リスクを定義**し、住民間で知識を共有する。

例えば、地震被害地域での「リスク」は，下記が考えられる。

A:落下物リスク　☛電柱上のトランス、瓦屋根、看板、　B:ブロック塀崩落

C:自宅リスク☛家具転倒、天井崩落、家屋全半壊

A と B のリスクは、地域住民で「**街歩き**」して、安全避難路を見つけておく。

C は**自助で事前対策**してリスクを軽減しておく(②のアンケートが有効)。

自主防災は、上記リスクに対応した「準備」「組織」「活動」にする。

②**町の防災対策実状を定点観測**する。

全戸対象の防災アンケートを実施し、最新の町内防災実状を把握する。

☛「安心**世帯カード（世帯情報）**」+「**自助準備状況**アンケート」☜巻末に資料添付

世帯カードアンケートで、町内の災害弱者の存在を把握し、安否確認時の弱者優先訪問につなげる。自助アンケートで、町内の自助準備状況から今後の強化ポイントを探る事が出来る。その一環で私の自治会では、「安価感震ブレーカ」を町内有志で手作り•販売して、感震ブレーカ設置率を70%にまで高めた成果に結びつけた。

(2)「**防災も町作り**」で防災活動を孤立させない。

自治会で自主防災活動が軌道に乗り定着するためには、一体感と絆のある町づくりが必要である。日頃からの自治会活動―「バザー」「町内清掃」「お祭り」会」「餅つき」「運動会」「趣味の会」―等を活性化して、これらのイベントの中に「防災イベント」を入れ込み、防災の町内認知度をあげておくことが重要である。

『防災も町づくり』の意識を共有して「防災の孤立=形骸化」を排除しよう。

2章-Ⅳ．防災訓練の構想作り

1．まずは,被災時に短時間で異常発見できる「安否確認訓練」から始める。

2．次に「実働隊（消火、救出、救護」との連動訓練
（実働隊と本部のリアル通信に必須のﾄﾗﾝｼｰﾊﾞ訓練を組み込む）

＜実働隊訓練では＞
①消火訓練：消火器使用訓練、消火器持寄り消火訓練、スタンドパイプ放水訓練
②救出訓練：瓦礫下敷き救出訓練、2階・外階段からの救出訓練（ロープワーク），
担架・リヤカー搬送訓練
③救護訓練：止血包帯訓練、骨折副木訓練、心臓マッサージ（肋骨圧迫）訓練
（AED保有自治会では、AED訓練も）

①訓練なき実践は混乱必至・・・
②被災時奇跡を起こした自治会は
自主防災隊を持ち、・・・・
③実践的訓練を繰り返す・・・・

3．順次実践的訓練に練度アップ(通常は休日昼間の訓練!??)
①平日昼間の訓練ーーー何人集まれるか？　マニュアル通りに出来ない？？
②夜間訓練ーー出来れば、暗闇訓練（照明、投光器）・・・どこまで出来るか？
③拠点避難所連携訓練ーー避難所との情報交換、避難者の搬送訓練
④毎年アイデアを出して、訓練の実戦化に努める。
（いっとき避難場所と自主防災本部との連携、怪我人の病院搬送訓練、・・・）

防災訓練定番の「炊き出し」訓練は、命を守る上記訓練より優先度は低い。訓練で何を優先する！

まず、被災時に短時間に異常事態を発見できる**「安否確認訓練」から始める**事を勧めます。
次に、**自主防災実働隊（消火、救出/救護）との連携系訓練**へと進化させる。
☛「安否確認」で異常事態を発見したら、センターに待機している実働隊を異常発生現場に派遣させて「実働隊訓練」を実施する。
「安否確認訓練」と「実働隊訓練」を連携させて実践力を高めていきます。
連携訓練では、異常事態発生現場とセンターの実働隊との**連絡・通信はﾄﾗﾝｼｰﾊﾞを活用**して、リアルタイムな連携を実現する。「命を守る」防災は、時間との勝負です。
さらに、**訓練を「休日昼間」—>「夜間」—>「平日」—>「抜き打ち」を実践化**すると良い。
（訓練してない事は本番でも出来ない☜訓練無しで打席に立ってもヒットは打てない。）
訓練に当たっては、**事前に**全戸に「訓練案内と訓練タイムライン」を配布して、訓練の目的と内容を、役員を含めた**住民全員に周知徹底させておく**ことも重要である。
住民に「安否・防災訓練の呼びかけ」の為の配布文書の事例も、巻末の「添付資料」に入れておきました。参考にして下さい。

3 章　自主防災(訓練)活動各論

3章－Ⅰ.安否確認(地震の場合を中心に記述) ➡ 『どうやって助けるの❓』

1．安否確認の目的：異常の早期発見、即時対応－＞「人的被害ゼロ!!」への挑戦

被災直後の被害＝異常状態を早期発見、即時対応で「人的被害ゼロ」を目指す。

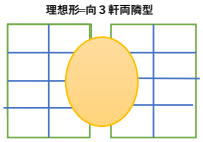
2．安否確認の範囲：確認時間短縮化の為「小さな範囲」

目の届く小さな範囲（10～１５軒）＝自治会の班単位が望ましい。

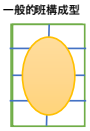
－＞知り合いの範囲＝異常発生認識が容易、訪問者と被災者が顔見知り＝安心感

－＞訪問範囲の決め方：自治会の班構成と同じにしないと混乱

理想形=向３軒両隣型



一般的班構成型



左記の何れでもよい

ポイントは目の届く小さい範囲にすること・・・。

3．安否確認訪問者は誰が？

班単位に「安否確認者＝訪問者」を設定する。慣れと効率化の為複数年任期に!!

安否確認訪問時は、自治会の班長と同行し２人体制で「安心・安全」を確保。

訪問時は、事前収集した「災害弱者存在リスト」を携行し、弱者優先訪問をする。

確認終了後は、班単位の安否状況を本部に集め、自治会全体の状況を集計する。

4．確認の短時間化：３０分、出来れば１５分を目標！！

①確認範囲の小規模化ー班単位＝10～１５軒にする

②安全世帯は確認をスキップ－＞「安全の黄色いタオル」を安全世帯は玄関に表示

（あらかじめ、自治会で全世帯に「黄色いタオル」を配布しておく）

③「災害弱者存在マップ(リスト)」をもとに、弱者優先訪問！！

（あらかじめ、「災害弱者存在マップ(リスト)」を自治会で作成しておく）

5．異常発見時の対応

①訪問者は異常発見時には、自治会防災本部に速やかに報告する。

②本部は異常形態に応じて、現場に実働隊を出動させる。

怪我・下敷き：救出・救護隊（班)を現地に派遣－＞下敷き被災者の救出は 時間勝負！！

火事発生：小火なら、現場（近隣）の消火器を集め「初期消火」 を実施、同時に本部に消火隊(班)の出動を要請。

（XXXで小火発生、皆さん消火器をもって現場に集まってください）

消火隊は現地に出動して スタンドパイプ放水消火 を実施。

これらの異常時の現場ー本部ー実働隊間の連絡（報告・指示)は、時間との勝負となり非常時通信手段としての「トランシーバ」が有効かつ必須である

「安否確認」の目的は、被災直後に出来るだけ早く町内の異常事態を発見し、実働隊を即時に派遣して、救助･消火活動を通して「人的被害ゼロ」を達成することに尽きる。

その為に、**安否確認の単位**は出来るだけ小さくし、目の届く範囲にする。一般的には自治会の**回覧板の配布単位(10～15 軒=班)**にして、確認時間の短縮化を図る。

訪問者は、最新の班事情を熟知している班長と訓練なれしている安否確認情報担当との二人体制で安全性を確保しながら確実な訪問を実現すべきである。尚、訪問時は事前に収集した「安全世帯情報=災害弱者存在ﾘｽﾄ」を持参し、**災害弱者を優先訪問**する

安否確認時間の短縮化の為に、自宅が安全な世帯には事前配布されている「安全の黄色タオル」を玄関前に掲げてもらい、訪問時当該世帯はスキップすることも有効である。

安否確認は、班単位に同時並行で実施し、班の訪問時間=自治会の訪問時間となるように進めることで **15～30 分以内に終える**事が望ましい。

各班は安否確認が終了後、センターに赴き町内安否集計ﾘｽﾄを提出し自治会全体集計に協力する。これによってセンターでは、自治会全体の被災状況を把握する。

安否確認⇒異常事態発見⇒実働隊出動は時間との戦いで、**被災現場・センター・実働隊の間の連絡・指示・報告はﾄﾗﾝｼｰﾊﾞを活用**して即時性を確保する。

3章－Ⅱ．初期消火

大地震では被災直後は、消防車は来てくれない ➡ 初期消火は『自分と近所』で

1．初期消火3点セット

①各家庭で消火器消火（1階/2階に2本保有）
- まず自分で消火（発火後2分以内）・大声で近所に叫ぶ（消火器持寄要請）
- 自治会自主防災隊の消火隊に救援依頼　・目の高さの火で脱出

②被災時消火器持寄り消火（安全世帯は消火器玄関前を自治会ルールに！）
- 近所で消火器持寄り消火（発火後5分以内）
- 火が天井に達すると退避　ー＞自治会消火隊（スタンドパイプ）に合流、サポート

③自治会消火隊 によるスタンドパイプ放水消火（消火栓＝ 水道水利用、断水時使用不能）
- 発火当該家屋に放水（火が 2階/屋根に達したら諦める）
- 延焼を阻止する為に当該家屋の 隣家に放水（未火災の隣家への放水は自治会合意要！）
- 利用する消火栓は、 被災現場直近でなく、風上の場所 を選ぶ。

（補足）D級可搬消防ポンプ（ガソリンエンジン）による放水： 防火水槽 からポンプで吸水（ 断水時も可動）、ホースで放水（1分間に130 リットル）（防火水槽： 水道断でも吸水・放水 が可能）

2．準備と訓練で火災規模は10分の1に!!

『 耐震家屋＋感震ブレーカ＋家具固定 』＋『初期消火』…『自分事』として取り組もう！！

『火災』は自宅資産の焼失と隣家延焼の『火元』となることを自覚しよう!!

被災現場と自主防災隊との通信に**トランシーバ**の活用は必須

訓練時には

消防署への**連絡**と**立ち合い**を要請する

首都直下地震では、火災被害の膨大化が叫ばれています。死者 2 万 3 千人の内 1 万 6 千人が焼死者と想定されています。阪神淡路の経験を見るまでもなく、大地震後の火災に消防が現場出動できるのは3時間後以降で、平時を想定した消防体制では、消防車が到着できるのは災害規模の大きい一部の地域になる事を覚悟しておく必要があります。

被災後 3 時間以内の消火活動は、自分(自助)と町内の自主防災隊（互近助・共助）で対応するしかありません。でも、**火災は準備と訓練で規模を 10 分の 1 に**抑え込めるといわれています。

①火災は「出さない」事が最大の対策です。その為の4大事前対策は下記です。

☛耐震家屋　☛家具を固定　☛感震ブレーカを設置　☛消火器を 2 台保有

②もし自宅で出火・小火が起きたら、大声で「火事だ～」と叫び、**消火器で消火**して下さい。

③近所の人は、自宅前提示の**消火器を持ち寄り**、現場に急行して複数消火器による集団消火を実施して下さい。

④同時に、減災センターにﾄﾗﾝｼｰﾊﾞで「**消火隊の出動**」を要請して下さい。消火隊は装備を携行して現場に急行し、「**スタンドパイプ放水**」消火を実施する。

以上の**②～④を訓練して、火災規模を 10 分の 1 に抑え**ていきましょう。

3章－Ⅲ．救出救護：被災後勝負の1時間は「自分」と「自主防災＝共助」が主役

1．救出

①必要機材：《個人》ハンマー、ヘルメット、防塵眼鏡、防塵マスク、厚底靴、バール、
金槌、斧、のこぎり
《救出隊》丸てこ棒、角材、はしご、鉄パイプ（2～３ｍ）、大バール、ロープ、ジャッキ、
チェーンソー、　発電機、投光器、大ハンマー、キャスター付き担架

②ポピュラーな救出シーン＝家具・天井等の（瓦礫）下敷き被災者を救出する。
・救出隊員は「ヘルメット、防塵眼鏡・マスク、厚底靴」着用で現場に行く。
・被災者の上を覆っている瓦礫に、てこ棒やジャッキで隙間を作る
・隙間に角材等を投入して、被災者を救出する。
（阪神淡路の被災後1時間以内の死者の大部分は下敷き圧迫窒息死！！）
・2階や外階段の家での被災者救出を想定し、「ロープワーク」の訓練は必須！！

2．救護

①必要機材：救急セット、シーツ、毛布、ビニールシート、折り畳み椅子、リヤカー，車いす
②簡単止血、心臓マッサージ、骨折・ねんざの応急手当 ……日頃からの訓練で慣れが必要！！
③2時間以上の下敷き被災者は、クラッシュ症候群リスクがあることを前提に対応
・瓦礫に挟まれている状況から応急処置　・大量の水（１ℓ以上)を(経口保水)を飲ませる
・圧迫部位より心臓側に止血帯法を施す　・透析可能病院に搬送する

（クラッシュ症候群は自主防災での「対応範囲と可否」で意見が分かれている。当該自治体(消防)と協議・合意が必要!!)

クラッシュ症候群の兆候
瓦礫等の重いモノの下敷きで血管が圧迫されと・・・・・・
☛長時間圧迫後に救出されると血栓が心臓に飛び危険！！
①下敷圧迫2時間超
②バンバンに腫れ
③尿が茶褐色に・
④挟まれた箇所が
・感覚無し
・動かない

1.救出:　被災後１時間以内の下敷き被害者の救出で「命を助ける」！！

怪我人や下敷き被災者の救出には、しかるべき道具や装備を持ち、救出シーンを想定した訓練が必要です。

阪神淡路では、**下敷圧迫死・窒息死**が被災後１時間以内に３千人以上発生している。
また、下敷被害から救出された人の90%は、家族と近助の人によるものです。
(消防・警察・自衛隊に救出された人は、5%以下です。)

互近助防災に主眼をおく「自主防災」の最大の課題は、**被災後１時間以内**に下敷被害からの救出にあると言えます。ここでも時間勝負になるのでﾄﾗﾝｼｰﾊﾞは必須アイテムです。

救出活動が効果を発揮する為には、「装備」と「訓練」の充実は必須事項です。

①装備:「丸テコ棒」「角材」「はしご」「鉄パイプ」「バール」「ロープ」
「ジャッキ」「チェーンソー」「ハンマー」「発電機」「投光器」
「2～3 人で対応できるキャスター付き担架」

②救出隊員は、安全確保のため「ヘルメット」「防塵眼鏡」「マスク」「厚底靴」で出動

③訓練:家具・瓦礫の下敷き被害者を「テコ」「ジャッキ」で隙間を作り「角材」を投入して、被害者を救出する訓練は必須。救出した被害者を、安全に搬出するために、2階や外階段から降ろすロープワークの訓練もしておく。

2.救護:　最大の悩みは「クラッシュ症候群」への対応

救出された被害者は、何らかの怪我をしています。被災直後に救出された怪我人を病院に搬送できるまでの間は、自主防災の範囲で手当・救護する必要があります。

自治体が主催する家庭防災員研修を受講した人を中心に「救護班」を組織化して対応する事が現実的です。救護も、それなりの装備を持ち訓練しておかないと、いざという時に役に立ちません。

①装備:「救急セット」「シーツ」「毛布」「ビニールシート」「折り畳み椅子」「リヤカー」

②訓練:「簡易止血」「骨折・捻挫の応急手当」「心臓圧迫蘇生訓練」「AED 訓練」

これらの訓練を日ごろから消防署・消防団等との連携訓練を繰り返しておかないと、いざという時にパニクックに陥って何もできない状況に陥る。

③救護の現場での一番の悩みは、**「クラッシュ症候群」への対応**である。

クラッシュ症候群は**阪神淡路では 370 人発症し、うち 50 人が死亡**した。重量物の下敷きが 2 時間以上続くと、血流がとどまり血中に血栓(カリューム等)が停滞して、重量物除去時に血栓が一気に全身をめぐり、心臓停止を招く「恐ろしい症状」です。

ここでも、被災後の「時間との戦い」になり、**被災後 2 時間以内の救出**が「命を守る」リミットになります。

まず、地元の**消防の救急隊、医師会と「協議」**して、自主防災レベルでの対応の基本的考えを「**合意**」しておくべきである。**素人の限界**を踏まえて何が出来るかは悩ましい。

- ・クラッシュ症候群疑いの判断方法・判定基準(重量物圧迫 2 時間超？？)
- ・自主防災レベルで「やれる事」☛低体温症防止で体を毛布等で温める、••••
- ・「やるべき事」の訓練方法☛「心臓に近い血管縛り」「大量の水を飲ませる」•••••
- ・患者を運び込む近隣病院・クリニックの存在確認(Ex:透析可能病院？？)

3章－Ⅳ．避難(搬送)と誘導

1．搬送：1人の被害者を搬送するのに何人必要か？

①徒手避難(介添え)
②応急担架での搬送
③2階・外階段からの搬送はロープ補助で…事前訓練が必要！
④病院搬送の場合は、被害程度に応じて搬送先病院を決める
・自宅兼医院の病院は？　クラッシュ症候群：血液透析可能病院は何処に?
・大・中病院は満杯が想定されるので、軽症者は近隣の病院搬送を!!

2．誘導：常識と前提に捉われず、最善の選択を!

①夜間誘導は、ロープに連なって避難する
②リーダは、ハンドマイクと警笛を使ってまとめる
③隊旗（自治体旗）を先頭に、誘導する
④特に、延焼火災時の広域避難場所への誘導では指定避難場所に拘らず、
・風上の避難場所に誘導（自治会は、事前に広域避難場所を複数選定しておく）
⑤避難所への誘導では、場合によっては常識と前提を疑い行くべき避難所を選択
・一般的に避難所は「地震対応」で設定されている----オールマイティではない!
・特にCOVID－19禍では、避難所のキャパは通常期の半分以下で満杯かも。
・津波、洪水、崖崩れでは、指定避難所でも危険な場合がある。被災形態別避難先を住民で確認要!！
（日頃から、自治体・連合とケーススタディしておく）

搬送先病院の決定
①罹りつけの病院で・・・
日頃から対話しておく
（ご自宅は？透析は？）
②自治会で近隣病院マップ
（リスト）を準備
(担架/リヤカーでいける
範囲は？)
③病院マップをもとに、
被災時に開設病院を
チェック
④搬送先病院に搬送・・

休日・夜間も開業できるのは自宅併設病院
（オフタイム診療）

1.避難(搬送)

2 章の救出・救護で助け出した傷病者の搬送は下記に 3 つの段階を想定する。

① 2 階又は外階段から傷病者を下の平地まで下ろす。

怪我人を安定して下ろせる組み立て椅子と下ろすときに安定性確保のための「ロープワーク」の訓練をしておくと良い。

② 怪我人発生現場から自治会の減災センターまでの搬送。
搬送距離にもよるが、出来るだけ少ない人数での安全搬送に留意する。
その為には、キャスター付きの担架やリヤカー等の活用をお勧めします。
（一人に怪我人を 2～3 人で搬送できるように・・・）

③ 自治会減災センターから指定避難所又は近隣クリニックまでの搬送。
避難所へ搬送し、そこでのトリアージで「避難所での救護」「病院搬送」の指示に従うのが原則です。
避難所への搬送は、距離的に長くなるので、「車搬送」が良いが、道路事情によっては、最悪「担架/リヤカー搬送」も覚悟しておく。
その場合は、誘導者、搬送者を含めて６～7 名の人手を覚悟しておく。
避難所立ち上がり前に、自治会での緊急病院搬送のケースも想定しておく。その為には、平時から近隣の搬送可能クリニックを探索しておく必要がある。下記の手順で当該クリニックへ怪我人を搬送する。

<事前準備>
●自宅開業で被災時にも医師の在宅可能性がある近隣病院を探索
☛（休日･夜間の被災時にも**オフタイム診療が可能**？？？）
●自治会で、可能性のある近隣クリニックを**マップ上にマーク**

<被災当日>
●被災当日に自治会役員が「バイク」で当該クリニックの黄色旗を確認し「搬送可能先」を探しておく。

2. 誘導

避難誘導は下記の二つケースを想定しておく。

①指定避難所への避難民の誘導
在宅避難生活の困難な世帯が避難所に行くことになるが、個別バラバラに行くのではなく、自治会単位にまとまって避難するのが望ましい。
ココでは地震被害を前提に議論しているので、被災後 3 日目以降に避難所が立ち上がる事を想定して述べる。
被災後数日間は、家に住めない世帯は自治会等の「仮の一時避難生活エリア」に収容されているか、崩落不安の中で自宅で耐えている世帯を、避難所立ち上がり後に避難所まで誘導するケースについて述べる。
●避難所側では、避難民の収容スペース･エリアの割り当てに「世帯情報（基礎疾患、体調）」が必須で、入所受付時に必ず確認されます。
避難所避難世帯の「情報」は、自治体側で事前準備(リスト記入済)して、入所時に避難所受付に提出できる様にしておく。
☛「避難世帯情報」のサンプルを巻末の「添付情報」をご参照下さい。

●避難所避難誘導は、自治会で取りまとめて実施する。そのためには、誘導者が自治会旗を先頭に、ハンドマイクで声掛けしながら、集団で避難所まで行く。
（夜間移動になると、懐中電灯と誘導ロープも必要）

●避難所に「避難世帯情報」と避難世帯を引き渡し、以降の自治会と避難所の連絡ルートを開設しておく。

②広域避難場所への誘導。

このケースは、クラスター火災(延焼火災)からの避難になるので、住民全員避難が原則となり、「班単位(10～15 軒）」に纏まって『誘い合って』自治会の誘導に従い集団行動が望ましい。誘導リーダーを先頭に班単位の行動をまとめる訓練が必要。

この時、自治会は「風向き」を判断し、「風上方向」の避難所に住民を誘導する。

「風向き」で避難場所を選択できる様に自治会では、「複数の広域避難場所」を選定しておく必要がある。

☛巻末の「添付資料」」に複数広域避難場所の地図例を掲載。

☛自治体は自治会毎に一つの広域避難場所を指定しているが、自治会は自らの安全確保の為に「**あえて複数の広域避難場所」を選定**し、住民に徹底しておく。

(クラスター火災=延焼火災=スーパー火災については、「参考―11」で解説

4章．相互支援と弱者優先

1．近隣自治会（町内会）と相互支援（バックアップ）

①近隣自治会間で「人」「スキル」「機材」の相互利用と融通関係作り
（特に近隣自治会への延焼防止の観点での消火活動 連携 は大切）

②訓練の連携と合同化ーー訓練場所の相互利用、訓練の合同開催

2．同一町内に存在する施設(Ex：保育園）と「防災連携協議書」の締結

Ex：「AED共用」「スタンドパイプ共用」「非常用マンホールトイレ共用
「消火・救出・救護活動相互支援」「避難世帯への一時生活エリア開放」・・・ ETC

3．災害弱者への優先対応‥‥(自治体発行の要支援者リストは、利用制約が多い)

①毎年の「世帯カード」収集ー>「災害弱者存在マップ（リスト)」作り
ー＞被災時安否確認優先訪問ー>異常の早期発見ー＞対処の即時化

②異常発見時の「弱者タイプ別個別救助イメージ」を作っておく。
(徒手介添え避難？　車椅子避難？　担架避難? リヤカー避難?・・・)

③日頃からの付き合い
・定期訪問・声掛けー民生委員との協同
・町内イベント・防災訓練への参加のお誘い
・緊急連絡先の確認：存在マップ(リスト)に記載しておく☚「世帯情報の毎年ｱﾝｹｰﾄ」

④「110番」世帯と孤立可能性学童の交流☚「バザー」「お祭り」「餅つき」「学童の110番世帯訪問」

1. 相互支援

①近隣保育園との防災連携協議書の交換

・被災時非常用トイレの共同運用

・「いっとき避難生活エリア」の共同運用

・防災・避難訓練への参加

☛巻末の添付資料に「自治会と保育園の連携協議書」を添付

②近隣自治会との防災連携

☛今後の課題

2. 弱者優先

①こども 110 番の災害時運用

帰宅困難世帯の「学童の孤立」を救済する「こども 110 番」

☜県内、市内でも「唯一」の制度？？

☛巻末の添付資料に「こども110番の被災時運用マニュアル」を記載

②自治会に、避難世帯「一時避難生活エリア」の開設

☛自治会に 1 世帯、保育園に 2 世帯収容

☛巻末の添付資料に「一時避難生活エリアの運営マニュアル」を記載

5 章　避難所での災害関連死ゼロ

被災時に避難所に行くのは、自宅が危険で住めなくなった人です。一般的に避難所は「汚い、騒がしい、寒い、狭い」で、出来るだけ避難所には行かないで、「在宅避難生活」で頑張る事が必要です。避難所は自宅が危険で住めなくなった人たちの「最後の砦」です

特に、マンションや集合住宅は堅牢な建物が多く、建物崩壊の危険は戸建てより少ないと言えます。

「在宅避難生活」では、最悪 5 日～10 日間を「自力で生き残る」準備を日頃からしておく必要があります。「逃げずに留まる在宅避難」生活の知恵とアイデアは

☛最近注目のマンション防災のプロ・釜石　徹氏の書籍がお勧めです。

「マンション防災の新常識」　合同フォレスト　1650 円

災害直後の混乱の中で生き残っても、自宅に住めない人は避難所に行くことになりますが、**「折角助かった命」を避難所での「災害関連死」で失う**ことは避けたいものです。

避難所での災害関連死の実態と対策について、皆さんと考えてみたいと思います。

5章―Ⅰ避難所での災害関連死

1．東日本大震災での関連死

①関連死：3775人☛高齢者・移動困難者に集中（66歳以上が８９%）
②初期に集中:1カ月以内(1213人）、1～6カ月(1153人)
③原因：避難生活疲れ(638人)☛ストレス、睡眠不足、食欲減退、水分不足
避難所間移動疲労(401人)　持病悪化(283人)☚医療サポート遅延

2．対策

①災害派遣福祉チーム（DWAT）の派遣☛専門家による聞き取りと対応
②ストレス解消：「高齢者サロン」「子ども遊び場」開設
③T(ﾄｲﾚ)、K(ｷｯﾁﾝ)，B(ﾍﾞｯﾄﾞ)の改善
トイレ☛不便・不潔☛水分控え☛健康リスク
キッチン☛冷たい食事☛食欲不振☛体力衰退
ベッド☛雑魚寝☛ホコリ、冷たい☛肺炎、エコノミー症候群
④野外テントの準備☚基礎疾患者・高齢者：ストレス軽減、プライバシー

DWAT
Disaster　Welfare
Assistance　Team

5章ーⅡ　避難所で関連死ゼロの為に

1．スフィア基準：①一人当たり3.5平方米
②トイレは20人に一個

ストレス回避

2．被災2日以内に：T(ﾄｲﾚ) K（ｷｯﾁﾝ）B(ﾍﾞｯﾄﾞ）設置
トイレ：女性に配慮（場所・数）、トイレパックで衛生確保
キッチン＝暖かい食事　　ベッド＝段ﾎﾞｰﾙﾍﾞｯﾄﾞor簡易テント

3．9つの対策：健康でストレスのない生活の確保!!
①睡眠改善　②1日20分の歩行＆体操　③十分な水分補給
④食事改善（減塩､ｶﾘｭｰﾑ摂取）　⑤体重管理（入所前±2kg）
⑥感染症対策（ﾏｽｸ、手洗い、3密回避）
⑦常備・内服薬継続(お薬手帳必携) ⑧血圧管理　⑨禁煙

4．口腔ケア（口腔内雑菌は万病のもと⇒関連死の源）
水なしで口腔ケアできる「口腔指型歯磨きウエットシート」必携

避難所に入所できても阪神淡路でも東日本でも熊本でも「災害関連死」によって多くの命が失われています。「命を守り」たどり着いた避難所の「災害関連死」で命を失うのは、この冊子のテーマの「被災時人的被害ゼロ」の達成の盲点と言えます。

「災害関連死対策」は「感染症対策」と並ぶ『避難所の最重要テーマ』です。

日頃から、我々は住民目線で「避難所の関連死対策」を上記のキーワードを中心に『自分事』として考え、チェックし提言していく姿勢を持ちましょう。

6章.　災害被害ミニマム化の原則と姿勢

1.　災害に備える4原則‥‥だるま・片山氏

①最悪の事態を想定する（悲劇は想定外から）
②破綻より過剰反応(最適度の対策は不可能)
③疑わしくは行動する（やばいと思ったらまず行動する）
④空振りは許されるが見逃しは許されない（早めの指示が命を救う）
（早めの避難は空振りでなく素振り：素振りの回数が、本番でヒットを生む）

2.　災害を考える3つの姿勢･･･稲垣からの提言

①想像力を磨こう（何が起きる？起きたらどうする？防災＝想像力）
②自分事として考え・行動しよう（自分だけは大丈夫は無い）
③他を思う心を持とう（迷惑をかけない、弱者に寄り添う心！）

7章.　兵庫県報告書に見る5つの提言

（令和3年2月　座長：京都大学　矢守教授）

☛【住民による平時からのリスクの認知】が大前提！！

提言1：自分の命は自分で守るために、一人ひとりが「逃げるタイミング＝避難スイッチ」を地域とともに持とう。
提言2：一人ひとりが、自分に適した「逃げる場所」を地域とともに考えよう。
提言3：実効性のある避難行動要支援者（高齢者、障がい者）対策 の取り組みを進めよう。
提言4：個人・地域・行政が連携した取り組みんを進めよう。
提言5：行政は、住民や地域の主体的な取り組みを支援し、適時・適切に情報を提供しよう。

自主防災各論ー参考資料

参考ー１．神戸震災から学ぶ①～②

2016年1月１７日のNHKスペシャルと
kkベストセラーズ『震度7　何が生死を分けたのか」を参考に作成

参考ー２．スーパー火災に備える①～④

NHKスペシャル、新聞・TV・NET情報から筆者が編集

参考ー３．災害時の奇跡と悲劇から学ぶ

新聞，TV、　NET情報から筆者が創作編集しており、現場・現物･現人にアクセツしないで作られており、客観性に欠けるが何らかの学びを感じ取ってください・

①大地震　　④小学校(津波)
②福祉施設（洪水）　　⑤自治会（土石流）
③隣接エリア（洪水）　　⑥避難所(津波)

参考ーI　神戸震災から学ぶ①・・ 20160117NHKスペシャルより

(都市型大地震で、記録が残り科学的な分析ができている唯一の事例

1・神戸震災での死者数：６４３４人(うち80%の5036人は初日に死亡））

・被災1時間以内：3842人 死亡・・・・初日死の 75% は 1時間以内に死亡!!!

・被災後１時間：９００人は生存　　・被災後５時間：４７７人が生存

2・被災１時間以内の死者（３８４２人）の死因は？

・圧迫死：９０％・・・うち窒息死：2116人=家屋、家具,ガレキの下敷

圧死（即死）は圧迫死の７％と以外に少ない。
下敷になってもしばらくは生存。その後圧迫で呼吸困難になって窒息死するケースが多い。

(下敷被災者の救出は、自力･家族近所 が 90%、消防・自衛隊は５％以下

『何を学ぶ』；準備と訓練の大切さ、人命救助は被災後時間が勝負！！！

①自助の備え：「家屋の耐震化」 家具の固定
②共助の重み：「安否確認=異常の早期発見」
→「自主防災隊による早期救助・救出」

災害時に

命を守るのは

自助＝7
共助＝2
公助＝1

(続き)神戸震災から学ぶ②

３・被災後１時間～・・当日死亡の内、まだ９００人が生存していた。
この時間帯の死亡原因は「焼死」が多い。
・火災２０５件－直後：１１３件　１時間以降：９２件
（火災原因の　６５％　は通電火災！）
特に１時間～の出火は、関電の通電開始と同期。

『何を学ぶ』①地震の揺れを検知してﾌﾞﾚｰｶの電源を落とす
『感震ﾌﾞﾚｰｶ』の設置の重要性。
②自助=消火器、共助=スタンドパイプの重要性

４・被災後５時間以降・・当日死亡の内、まだ４７７人が生存していたのに。
消防・警察・自衛隊が　大渋滞　で、現場に到着できない現象が多発。
道路上にマイカー滞留。救助が間に合わない!!

『何を学ぶ』；被災時にマイカー移動は控えよう！！

阪神淡路大震災は、大正の関東大震災以来の都市密集地帯で起きた大震災でした。
阪神淡路は、各種の記録･聞き取り･アーカイブ･ビッグデータが膨大に蓄積され、AI コンピュータを使って分析された初めての都市型大震災事例と言えます。
ココではNHKがビッグデータをAI で分析して、色んな個別データ間の関連性に着目して「NHKスペシャル」として放映した番組内容を基に、筆者の視点で整理したものを記載しました。
特に『何を学ぶ』に着目して読んでください。　その学びを自分の･町の防災活動に何を取り込むべきかを考える材料にしていただければ、と思います。
阪神淡路は、「発生時間は早朝＝社会活動前」で「風速 3m」という災害としては稀有の条件下で起きており、ビルに人はいない、電車はガラガラ、道路も空いていた時の被害であったことを忘れないで頂きたいと思います。日中なら･･･恐ろしい！！
都市型大震災では、被災後 3 時間（特に 1 時間以内）は、消防車も救急車も我々の被災現場には来てくれません(来られません)。
この時間帯で「命を守り」「命を救う」のは『自助』と『互近助防災』であることを再確認しましょう。

参考－Ⅱ　スーパー火災に備える①・・NHKスペシャル+ネット情報で編成

1.首都直下地震の想定被害・・・条件が変われば被害は数倍に（冬・夕方・8mの風）！

①人的被害(死者）23,000人、焼死者 16,000人、怪我人123,000人

②全壊／焼失家屋610,000棟 焼失家屋 410,000棟

③要救助者 580,000人、避難者 720万人、帰宅困難者 517万人

④経済損失 95兆円

2.阪神淡路の火災

①風速3mの下で火災109件（数日間）、700棟消失、400人焼死（全死者6,450人）

②風速15mでシミュレーションするとーー>焼死者 3,000人以上

③避難行動：避難せず 67%、火災直後避難30%、火災前に避難3%

3.首都直下で世田谷（人口112万人）に火災なら(東大加藤教授)

①風速８ｍ、1時間以内に避難開始すると

出火件数 100件、40,000人が延焼被害で命の危険・・・これが首都圏全域で！！

スーパー火災に備える②・・・横浜市の公報より

4.横浜市の火災規模予測（元禄型地震）

①.試算の前提

『冬・平日・晴れ・１８時・北の風６ｍ』の条件でシミュレーション

②.火災被害の規模予測　　（首都直下は8mで予測）

- **発生件数：３７０件(火元)**
- **焼失棟数：７，８００棟(延焼)**
- **焼死者：１，６００人**
- **負傷者：１，８００人**

③.発生場所(木密密集地域にクラスター型火災発生)

- **大規模地区：中区、神奈川区**
- **中規模地区：西区、港北区、鶴見区**

条件が変われば被害予測は変化（風速＝神戸3m、関東大震災13m）

スーパー火災に備える③…逃げる、備える、ITアプリ

5.どう逃げるか?

①方向は風上、広域避難場所を目指す。
指定の避難場所が風下なら、指定外の他の避難場所を目指す。
(日頃から、複数の 広域避難場所 を確認しておこう・・・・・自治体の指定は1カ所) ⬅ 重要

②何時逃げるか?・・強風時はもっと早く!
年配者、要援護者:500m 先に2本の煙を確認したら・・・　『空振り覚悟の早めの避難!!』
健常者:100m 先に2本の煙を確認したら・・・・　『確実な逃げ時は無い自己責任!!』

③情報と目視確認で自己判断が原則(自治会の自主防災隊の誘導に従う)

6.火災を大きくしない為に

① 耐震家屋、家具の固定 感震ブレーカ 消火器保有等の対策を確実に!!

② ①+初 期消火を頑張れば、火災被害は 10分の1に!! (初期消火:消火器単独/持寄り、
火の高さが目線まできたら、初期消火活動をやめ即避難　バケツリレー、スタンドパイプ、・・・・)

7.早めの避難をする為のアプリ

①東工大・大佛俊泰教授『災害情報共有システム』アプリを開発・・・・・・同様のアプリが多数!
・倒壊家屋、火災発生場所をアップ――会員間で情報共有
・風向きで避難路・方向を提示　・向こう12時間先までの延焼シミュレーションを見れる

スーパー火災に備える④:火災旋風の恐ろしさ

8.火災旋風とは?・・・・大規模火災の風下で発生

大火災で竜巻状に上昇する帯状火災のこと:高さ200m以上、1,000 度の高温　にも!

9. 関東大震災では

東京で110個、横浜で 30個が記録されている。国技館・大江戸博物館周辺が最大規模。

10.東京都が発表する危険地区(木密住宅地域) ☛ 横浜では中区・神奈川区!!

①大田区蒲田電車区一帯 ②世田谷区羽根木公園一帯 ③中野区哲学堂公園一帯
④中野区鷺宮一帯　⑤練馬区上井草スポーツセンター一帯
⑥板橋区向河原住宅一帯 ⑦葛飾区高砂団地一帯

11.逃げ方チェックポイント

☛身の安全を確保出来る可能性にかけて「逃げて」「生き残る」
①周り一帯の空が暗くなるのが予兆 ②火災の風下には行かない(風上の広域避難場所へ)
③延焼中地域に近づかない　④鉄筋コンクリート等の頑強な建物に避難
⑤建物の陰で落下物を避ける　(・・・・・・風上へ集団で避難⇒最後は広域避難場所へ)

参考－Ⅲ　災害時の奇跡と悲劇：何を学び・何を提言するか?

1．大地震・瓦礫下敷き被害での奇跡と被害

2．福祉施設で成否を分けたのは何か？

3．隣接エリア：自治会自主防災活動の差？

4．小学校：実践的防災教育と避難訓練の差？

5．自治会：自主防災組織と「自分事訓練」の差？

6．避難所(陸前高田・松原地区体育館)で何が?

奇跡の町の５大要素

①地域の災害リスクを知る町

②一体感・絆のある町

③自主防災組織の存在

④継続的訓練の実施・

⑤災害弱者への優先対応

防災塾・だるま　会員　稲垣博正　編集

ココでは上記の６つの事例について、「奇跡」と「悲劇」の分岐点と思われる項目を比較しながらまとめています。

　ただし、これらの情報源はTV、新聞、ネットから入手したもので、筆者が被災地の現地で現物を見ながら、現地の人の声をきいた一次情報ではありません。

　筆者が集めた二次情報を、筆者の価値観に基づいて整理したものである事をご承知の上で、お読みください。

　その分を割り引いて「何がしかの学び」を感じ取っていただければ幸いです。

奇跡と悲劇：何を学ぶか？

1．大地震・瓦礫下敷き被害での奇跡と悲劇

場所	長野・白馬村堀の内地区	阪神淡路(特に神戸地区)
何時	2014年11月長野北部地震	2011年1月阪神淡路地震
結果	11人が崩落下敷き・全員無事救出	被災1時間で2116人の下敷圧迫死
何が?	①被災で４８軒全半壊、下敷被害１１人発生 ②近隣住民が、安否確認後被害現場に急行し チェーンソーとジャッキで全員救出・・ （消防が来る前に被害者全員を救出） ◎４年前から「災害時住民支え合いマップ」 ・要支援者に赤〇、支援者に青〇印 ◎区（８世帯):組長と２人の伍長➔全ての活動単位➔村内清掃、お祭り、安否訓練➔絆の源	①全体犠牲者6434人死亡：被災後1時間が勝負 ②初日で5036人死亡のうち1時間以内に3842 ③3842人の内2116人は瓦礫下敷き圧迫窒息死 ④下敷き犠牲者の救出は誰が？・・・・・・・ 家族と近所：９０％　消防・自衛隊：５％以下 ⑤1時間後～のリスクは火災：6割は通電火災!! ⑥この経験➔耐震家屋、家具固定、自主防災、 感震ブレーカ等の言葉が日常語化した・・
学び	①隣近所(区)の付き合=絆が防災の基本・・ ②消防到着は１時間後：直後の救出は地域で ③絆+支えあいマップ+訓練が奇跡を起こした	①大地震では、被災後1時間が人的被害ゼロ化 の最大勝負➔地域として何が出来るか? ②消防等の公助はこの時間帯では間に合わない ③自分の命と町は自分たちで守る➔・・・・・
提言	①被災直後の救助は地域力が必須➔自分の・ 街は自分で守る➔仕組みと訓練が必要 ②救出は二次災害防止のため２人/組以上で・	自助：耐震家屋・家具固定・感震ブレーカ 共助：安否確認・自主防災隊・訓練・・・

2．福祉施設で成否を分けたのは何か？

場所	川越・キングスガーデン	球磨村・千寿園
何時	2019年10月19号台風	2020年7月球磨川豪雨
結果	水没老人ホームで犠牲者ゼロ	逃げ遅れで、14人の水没死の悲劇
何が?	①１２日午後、台風接近で市とﾎｯﾄﾗｲﾝ開設 ②夜間待機要員を５➔２４人に増員・・・ (施設長のリスク感応度:早い決断、強い指示） ③１３日２時～全員避難開始➔４時完了・ （１２日夕食後、避難困難者の事前避難開始 ） （本館１階➔別館３階に全員１２０人） ④市に救援依頼・・・・・・・・・・・・・ ➔全員を市の別施設に分散収容	①3日17時避難準備、22時時避難勧告、4日3時 避難指示➔3日17時には村から施設に電話 ②施設では当直を普段通り5人を指名・・・・ ③4日4時頃、見回り職員から越水危険を申告 ➔施設長は様子見と判断・動かず ④5時頃から近隣住民の支援で避難活動開始・ ⑤7時頃浸水、2時間後１階は水没・・・・・ （避難は間に合わず１４人の死亡）
学び	①施設長の「災害時死者を出さない」方針 ②マニュアル整備と訓練の繰り返し・・・ （当日は全員訓練通りに行動）	①自治体―施設長―職員間の情報連携不足・ ②マニュアル・訓練が土砂災害一辺倒で・・ 「水没」が抜けていた➔想定が甘い
提言	①リーダの災害熱意の施設全員への徹底・ ②施設独自の「避難スイッチ」設定・・・ （メイン階段５段目浸水で避難）	①リーダのリスク感応度が成否を決める・・ ②マニュアル・訓練は想定リスクを網羅せよ ③早めの決断、強めの対策が命を守る・・・

3．隣接エリア(岡山・小田川流域)：自治会自主防災活動の差？

場所	総社市・下里地区	倉敷市・真備地区
何時	2018年7月西日本豪雨で高梁川支流の小田川決壊	
結果	地区全員が無事避難	家屋１階で４２人の水没死
何が?	◎明治時代に水害体験➔東日本震災後に自主防災組織「共助組織」結成 ◎共助組織=班単位(15世帯)で訓練 ①当日は16時役員が公会堂に集合➔22時に再集合➔2人/組で水位監視 ②住民への避難呼びかけ➔班単位の避難➔4時半全員避難完了➔死者ゼロ	◎自治会単位の自主防災活動の低調な組織文化・・ ◎防災訓練も安否確認訓練も形式的・・・・・・・ ①当日も「避難情報」でも避難行動しない住民多数 ②逃げ遅れで1階で浸水死42名、うち36名は高齢者 (2階で水没死は1名、いざという時は人は動けない) ③健常者は2階以上に垂直避難で2350人が救助・・ ➔被災後、要支援者マイタイムライン作りに注力
学び	①地域の災害体験を語り継ぐ文化・ ②班単位の身近な組織での安否確認 ③自主防災組織の存在と訓練実施・	①準備と訓練の無い街に「奇跡」は起きない・・・ ②公的避難情報以外に自己「避難スイッチ」が必要 ③高齢者・災害弱者の早めの避難を徹底しよう・・
提言	①地元の災害リスクの洗出しと継承 ②自治会・町内会単位の自主防災・ ③訓練を毎年レベルアップで実戦化	①自治会単位の自主防災組織と訓練が防災の一丁目 ②高齢者・弱者に配慮した防災=マイタイムライン ③最後の避難手段は「垂直避難」を確認しよう・・

4．小学校：実践的防災教育と避難訓練の差？

場所	釜石市・鵜住居小学校	石巻市・大川小学校
何時	2011年3月11日東日本地震・津波	
結果	児童全員が高台避難	校庭に集合中の児童が被害
何が?	①古老の教え『てんでんこ』の言い伝え 「早く」「高く」「遠く」へ逃げる ②8年前から群大片田教授の・・・・・ ➔『防災教育』の継続と実践 毎年２回、全校生徒で高台避難訓練 ③児童生徒は、訓練通り一目散に高台に避難で全員無事を達成	①津波発生時、校庭に全校生徒を集め・・・ ➔避難方法をめぐって教職員で５０分協議 ②協議中に津波に襲われ８４人が死亡・・・ (保護者引き取りで２４人は助かった) ③ハザードマップでも津波浸水区外・・・・ ➔マニュアルも市の雛形準拠・・・・ ➔津波を想定した教育・訓練もなかった?
学び	①子供の時からの防災教育の重要性・・ ②防災は訓練・訓練また訓練・・・・・ (最悪を想定して)	①保護者の提訴で自治体と学校が敗訴・・・・ 事前防災とリスク予見は地域の責務 ➔怠れば逆提訴のリスクも！！
提言	①防災は準備(教育・マニュアル)と訓練が命を救う!! ②準備と訓練の無い所に奇跡は起きない	①自治体・学校・自治会で地場リスクを洗い出し事前防災への取り組みを協議しよう ②学童の命を守る防災教育・訓練は学校の責務

5．自治会：自主防災組織と「自分事訓練」の差？

場所	広島・洋国団地	広島・大原ハイツ
何時	2018年７月西日本豪雨災害（土砂災害）	
結果	訓練通りの避難で被害０	100戸中12人の水没死
何が?	①3年前の広島地滑り災害を契機に・・・ ➔自主防災組織を立ち上げ （団地固有の避難路も自主開設） ②災害弱者存在マップと誘導担当者を設定 ③当日は、近所で誘い合い避難所に避難・ （団地で10件の大破被害：人的被害ゼロ）	①当日は１００軒中水没死１２人の被害に遭遇 ②避難所で初めて同じハイツの人と挨拶）・・ 近助付き合い・絆の希薄な新興住宅 ③2019年7月のTV朝日で被害状況を放映・・ （被災後、自治会自主防災活動を開始） 失敗から学ぶ地域へ!!
学び	①近隣の災害を自分事に出来る地域感度・ ②災害時被害集中する弱者への優しい視線	①バラバラの住民避難は命を守れない・・・ ②日頃からのお近所付き会いが防災のベース ③マイ・タイムライン作成の重要性確認・・・
提言	①自治会単位の自主防災活動が防災の起点 ②弱者優先救済の仕組みと準備の重要性・ ③近所との絆、実践的訓練の重要性再確認	①防災は近所との絆・付き合いが第一歩・・ ②失敗の反省から何を学び、何を変えるか？ ③学べる組織は強くなれる・・・・・・・・

6．避難所（陸前高田市・松原地区体育館：地域避難所に指定 ）で何が?

誰が	体育館で練習中の女高生	避難所避難の地域住民
何時	2011年3月11日東日本大地震	
結果	高台に緊急避難：無事	避難住民の大半が水没死
何が?	①練習中の高校女子バレー部員は・・・・ 大きな揺れで、屋外に緊急脱出 ②顧問の先生の機転で、全員で近くの高台まで避難➔全員無事 （マニュアルより自分のリスク感度を重視した教師の勇気）	①体育館が市の指定所避難所・・・・・ ➔住民はマニュアル通りに避難所へ ②想定津波は６ｍ、当日は１５ｍの実績 ➔想定外の被害発生 ③避難住民の大半は津波水没死・・・・ （かの鵜住居の大人たちもマニュアル通りに指定避難所の防災センターに避難して悲劇） ④陸前高田の38か所の避難所は水没）
学び	①余裕があれば、想定以上の避難行動を! ②マニュアルには、想定外の時の・・・ ➔特記行動指針も必要	災害対応で命を守る４原則 ①想定を信じるな：阪神、東日本、西日本豪雨 ②マニュアルを疑え：地震中心記述が一般的・ ③最善を尽くせ：空振=素振り、一旦避難・・ ④率先避難者になれ：迷わず最初の避難者に！
提言	①マニュアル・想定を疑え・・・・・・・ ②全ての大災害で想定外が発生している・ ③最悪を想定した個別避難カルテの作成・	

5種の添付資料

1• 減災アンケート
　① 安心世帯情報アンケート
　② 班内安否確認ﾘｽﾄ
　③ お助け人/自助準備状況アンケート
2• 減災役員と行動マニュアル
　④ 減災役員就任規約と減災役員体制
　⑤ 被災時役員の行動マニュアル
　⑥ 被災時住民の行動マニュアル
3• 防災訓練
　⑦ 防災(安否確認)訓練のご案内
　⑧ いっとき避難場所訓練と防災見学ツアー
4• 自治会と保育園の防災連携
　⑨ 連携対象のテーマ
　⑩ こども 110 番の災害時運用マニュアル
　⑪ 一時避難生活エリアの運営マニュアル
5• ⑫ 自治会防災活動写真

以上の添付資料は、筆者の自治会で実際に使っている「アンケート」「規約」「マニュアル」等の現物資料です。

内容的には、汎用性はなく個別具体的な事例ですので、皆さんの自治会でカスタマイズして活用していただければ幸いです。

次頁以降に上記の添付資料を公開していますので、ご一読下さい。

添付資料：自主防災活動で使用中の「アンケート」「規約」「マニュアル」

南笹野台自治会
2022年度 アンケート 1/2

★ 記入する前に読んでください

＊このカードは災害時に、班内安否確認参考情報として使用する目的に限定して収集します。
＊カードの記入は強制ではなく、本人の意思で必要と思う範囲で記入してください。
＊このカードの収集、管理、運用は班内限定で他への公開・提供は致しません。
＊毎年最新情報を収集し、前年度分は責任を持って廃棄します。　　2022年　　月　　日

①　＊**本資料は、被災時避難所に入所時に参考資料として避難所にも提供します。**

A　減災安心　世帯情報カードアンケート　兼　避難所入所時提出世帯カード

1.家族の情報をご記入ください

組　　班	
世帯名	
家族人数	人

年代	1. 80才以上　2. 70才代　3. 大人（中学生以上）　4. 小学生 5. 未就学児　6. 乳幼児			
状況	1. 寝たきり	2. 車いす	3. 視聴覚不自由　4. 歩行困難	**5.基礎疾患あり** （糖尿、心臓、等）

	氏名	**年代**	**状況**	知っておいてもらいたい状況
記入例	*笹野　太郎*	*2*	*2,4*	*長男家族が東笹野台に住んでいる*
世帯主				
同居人				
同居人				
同居人				
同居人				
同居人				
同居人				

2. 知らせておきたい情報があればご記入ください（**かかり付け医、常用薬等**、**基礎疾患**は具体的に）

状況記入の方:①入通所福祉施設名(　　),②担当ケアマネ氏名(　　)

3. 緊急連絡先　：　何かあった時に連絡してほしい連絡先

氏名　　続柄　　☎番号　（　　）　　－

氏名　　続柄　　☎番号　（　　）　　－

4. この情報を災害時の安否確認情報以外に緊急時（家族不在に急病で搬送等)にも
連絡先を確認する為に使用してほしいですか？どちらかに〇をしてください

1. 使用してほしい　　2. 使わないでほしい

南笹野台自治会

③

【班内安否確認リスト】

年　　月　　日

1　組　　班

訓練時使用　該当：〇

NO.	世帯名	世帯人数	在宅者数	**要救助・支援**他、伝達事項	本日の安否訓練を知っていたか	玄関先へ消火器の供出	黄色タオルの掲示
0	（例）笹野台太郎	4	3		〇	×	×
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
	単身世帯者とは、安否確認訪問時に『声掛け』して下さい				〇 計：	〇 計：	〇 計：

【災害時使用】

□要支援先

1．救出：　　軒

2．救護：　　軒

3．消火：　　軒

□被災者認定候補

1．拠点避難：　　世帯　　人

2．在宅被災：　　世帯　　人

班情報担当者様　：　年１回の「Ａ．減災安心　世帯情報　アンケート」（各世帯記入済）を、班長からうけとましたら、上表の「世帯名、世帯人数」と「要支援者情報‥」を事前に記入しておいて下さい。
記入後、5部コピーをして2部は自分、4部を「班長／組情報リーダー／組情報副リーダー／民生・児童委員」へ渡して下さい。（＊1）

（＊1：班情報担当が班長と兼務する場合は前班長に参加してもらう）

（　）内は世帯数　1組：1班（15）、2班（15）、3班（14）、4班（13）、5班（9）、6班（10）、7班（10）、8班（10）　計 96

2021年4月

②

B．災害時「お助け人情報」・「お助け器具」所有者に関するアンケート

被災時に、自治会内に救助（救出・救護）・消火班を臨時編成し、自治会全員参加型で
『被害ゼロ』の町づくりを目指します。
その時に、様々なプロやその経験者のお力をお借りしたいと考えています。
該当する番号に〇をつけてください。　　2021年　月　日

確認事項①	：お助け人	1　看護士・保健師経験者	2　家庭防災員経験者
		3　建設業経験者	4　電気工事経験者
		5　工作得意者	6　消防士・消防団経験者
		7　消火活動に協力できる人	8　救出・救護活動に協力できる人

確認事項②	：お助け器具	A　ハンマー	B　バール	
		C　油圧ジャッキ	D　リヤカー	
		E　エンジンカッター	F　チェーンソー	G　その他：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ （ご記入ください）

C．減災（防災）意識と行動 に関するアンケート

横浜市で今後30年間に震度6以上の超大型地震が発生する確率は７８％との発表がありました。
災害は避けられません。その時命を守るのは自分の準備と行動です。

自助でどこまで自分の命を守るか

皆さんの自助としての準備状況をアンケートし、南笹野台の現状を認識し、今後の減災活動の
基礎情報　（啓蒙、研修、訓練）として共有したいと考えております。

該当項目の［保有・実施］に、”済み”あれば、〇をつけてください。
「何日分」については、備蓄日数を、記入してください。

調査項目	保有・実施：〇	備蓄日数	備　考
① 消火器の保有			
② 家具の固定			
③ ヘルメット			
④ ホイッスル			
⑤ 携帯ラジオ			・電池切れに注意してください。
⑥ 懐中電灯			・乾電池を余分に用意しておくと良いです。＊
⑦ バール			
⑧ ロープ			
⑨ 感震ブレーカー			
⑩ 飲料水の備蓄		日分	目安：2L（リットル）×人数分×5日分＊＊
⑪ 食糧の備蓄		日分	
⑫ 簡易トイレ			
⑬ 簡易コンロ			

＊　：乾電池だけでなく、手回し発電（ダイナモ）と併用する手動充電タイプもあります。
＊＊　：500ml×4本の方が扱いやすいと思います。　また空きボトルはすぐに他の用途に使えます。
長期の避難生活や、長期の断水に備えて、空きペットボトルも数本ストックしておくと良いと思います。

公開用・**南笹野台減災センター組織・役員規約**

16年月4月１日　公開版

南笹野台自治会は、被災時に全戸安否確認を行う『**安否確認情報隊**』と被災者救出・救護、初期消火活動を行う『**自主防災実働隊**』を【**減災センター**】**として組織化**する。『減災センター』は、**南笹野台自治会の認定組織**とし、**自治会会長がこれを管轄**する。

1・**減災センター組織役員（以下役員と記す）は以下を言う。**

減災センター長、副センター長

いっとき統括リーダ、いっとき副統括リーダ

組情報リーダ、組情報副リーダ、（班）情報担当

自主救出隊、自主救護隊、自主消火隊

2・**役員就任の適格性**

役員は、**平日日中の被災時の減災活動**の出来る可能性が高い自治会員とする。

3・**役員の任期（就退任の起点は４月）**

各種訓練時、被災時の迅速行動を考え、役員**任期は原則3年**とするが、再任は可能。ただし事情があり、役員業務履行が困難な場合は、途中退任も可能。

4・**役員の交代**

役員が満期終了、または途中退任した時は、速やかに後任の人選を行う。

後任の推薦、人選については、**自治会4役と、組長、センター長、副センター長、組情報リーダが協力**して当たるものとする。

5・**役員の責任**

役員は、自分に課せられた**任務を真摯に遂行**する（研修・会議出席、訓練・被災時）。ただし、被災時の役員任務遂行に伴って発生する**救助対象（者）に対する事故**については、役員は**一切の責任を問われない**ものとする。

6・**班情報担当の代行**

班単位の**情報担当は**、班の事情で適任者が不在の場合は**、兼務・代行も可能**とする。　**代行**;班の情報担当を出来る人が現れるまで、他班の人が代行できる。

兼務・代行の場合は、**減災センター体制図に、その旨を明記**する。

7・**笹小地域防災拠点役員との兼務**

（減災関連）役員と拠点登録役員（11名）は、双方の**実効性を考慮**して**出来るだけ兼務しないように配慮・人選**する。被災時、**兼務役員は自治会長と連携**し、**臨機応変な対応**（行動優先順位、会長報告・承認）を行う。

8・**自治会役員との兼務**　（減災関連）役員と自治会役員の**兼務は可能**とする。

9・（減災関連）**役員の出動**

①**震度5強以上の地震発生時**及び自治会・センター主催の**減災訓練時**

②**センター主催の会議・研修**―a:全体会議、b:隊別会議、c:目的別合同研修

『南笹野台　減災センターの組織と役員』

2018•3•25　4版（新体制、安否確認への前班長関与）

減災センター　　第三公園（南笹野台会館）

センター長＝自治会長:河野　明　　赤字は新任者
副センター長:小田　陽夫、稲盛　博正、　高木　秋彦
（センター長、副センター長不在時は、森田、土井、佐藤の順位で代行）

いっとき避難所統括隊

第三公園	1組統括リーダ:伊藤幸男,	副リーダ:染谷峰子
南公園	2組統括リーダ:藤本洋一（兼）,	副リーダ:稲盛賀子

安否確認情報隊

1組情報リーダ　小谷秀人（兼） 副リーダ　岡元　善信	2組情報リーダ　森田　啓一 副リーダ　山田　修司
1班情報担当　西山　孝也	1班情報担当　大元　紀美子
2班情報担当　多摩　勤	2班情報担当　西野　勉
3班情報担当　西野　聡子	3班情報担当　高城　武志
4班情報担当　中林　治代	4班情報担当　大林　文子
5班情報担当　水野　千勢子	5班情報担当　亀田　和信
6班情報担当　権藤　恵一	6班情報担当　原田　仁
7班情報担当　佐橋　啓子	7班情報担当　二見　幾雄
8班情報担当　矢野　美智子	8班情報担当　吉沢　正利（兼）
つくし保育園	

（各班の班長、前班長は可能な範囲で安否確認に協力する。）

自主防災実働隊•••（緊急通信網の構築•運用）

自主救出隊	隊長:土井紀一郎　副:奥田　宏
サポータ	宮田弘、小谷秀人、藤本洋一、佐橋眞二,政本敏康、秋元信一,西澤秀人
自主救護隊	隊長:武藤妃都美　副:村上真理子
サポータ	山﨑寿、番場さかえ、山田久恵
自主消火隊	隊長:佐藤小一郎　副:児島惟邦
サポータ	新田岩男、吉沢正利、山﨑喜一郎、溝田豊,高城丈吉、青田邦弘、吉田真一、近藤一二三

笹小・拠点連絡員――宮田　弘，真屋　穂秋、坂元　裕之

（公開版）　被災(訓練)時 **減災センター役員の行動マニュアル**

平成１６年４月１日

本マニュアルでは、震度5強以上の被災時に、減災センター組織役員が実施すべき行動の最低限を規定する。大災害に遭遇した場合は、この規定を基準に臨機応変の対応をする。

なお、大地震の時は、被災時のみならず、余震の継続での被害を想定し、減災センターは被災後3日間は開いておく。被災停電後の通電時の消火対応も本マニュアルに準ずる。

(1)いっとき統括リーダ、副リーダ

①被災後、先ず自宅と家族の安全を確認‥安全でなければ自宅の対応を優先。

②安全なら、自宅の消火器と安全タオルを玄関先に出し、いっとき避難所に行く。

避難所に行く時はヘルメットを着用し、飲料水、簡易食品、ﾄｲﾚﾊﾟｯｸ、筆記具を持参する。

③その後集まってくる住人から、自宅と近隣の被災状況を聞き、余裕のある人には『減災センター』に行き、指示待ち待機するように要請する。

異常報告があれば、組情報リーダに報告、同時に組情報リーダから、町内全体状況を聞き、集まった住民に報告する。住民に情報共有による安心感を与える。

④減災センターから要請があれば、集まった住民に、自主防災実働隊（以下実働隊と記す）等の応援を依頼する。被災停電後の通電時の町民対応も被災時に準ずる。

(2)センター長、副センター長

①～②は(1)と同じ。②は減災センターに行く。

③集まってきた実働隊に指示して、減災センターの立ち上げを行う。

以下は、被災の規模、晴雨、昼夜で臨機応変に対応。

・机と椅子、掲示板の設定･･･センター本部、組別本部、実働隊本部

・非常通信用トランシーバの用意　・必要時、簡易トイレの設置（囲いテント？）

・夜なら、照明、投光器、発電機の準備

④組情報リーダからの組別報告を受け、町内全体状況を掲示板に記載。

安否確認の進捗をチェックし、情報リーダと連携し遅延班には、応援隊を出す等を対応。

⑤組情報リーダから救出・救護・消火の要請を受け、実働隊に出動を命じる。

出動した実働隊と時々刻々連絡し、必要なら応援隊を編成する。

⑥組情報リーダからの相談・要請を受け、拠点避難者世帯、在宅被災者世帯を確定し、必要書類を作成し、拠点連絡員と連携し、拠点搬送と物資配給の手続きをとる

⑦これらの作業が終わっても、余震の継続を想定し、被災後3日間は、朝・夕2回の被災状況の確認を組情報リーダ、班情報担当と実施する。センターの閉鎖は、全体状況を判断し、センター長が宣言する。

＊＊特に、被災停電後の通電火災早期発見の為に、通電時センター役員を動員し、初期消火に努める＊＊。

(3)組情報リーダ、副リーダ

①～②は(1)と同じ。②は減災センターに行き、組別本部を立ち上げる。

組別情報本部は、所在位置の明示、机・椅子・掲示板の設定。

③情報担当から集めた班別状況を組別に集約して、センター長に報告。

班別安否確認の進捗を把握し、遅延班への臨時確認隊の要請をセンター長に依頼する。

その過程で緊急を要する事態が発生したら、センター長に実働隊の出動を要請する。

センター長から町内の被災状況を確認し、いっとき統括リーダにも情報提供する。

④集めた班別状況から、情報担当と協力し拠点避難者世帯と在宅被災者世帯を確定する。(2)⑥につなげる。

⑤これらの作業が終わったら、センター長と相談して、情報担当の中から、必要に応じて実働隊に応援者を出す。

⑥(2)の⑦と同じ。被災後3日間は、朝・夕町内の状況把握。停電後の通電時も安否確認。

(4)班情報担当、(班長、班長=情報担当の場合は前班長)

①～②は(1)と同じ。②は班の所定に場所に、情報担当・班長(前班長)と集まる。

③情報担当は、班長(前班長)と協力して、班内の全戸を訪問して安否確認をする。

・その時、優先訪問先を優先して訪問する。その後一般先の安否確認訪問をする。

訪問しながら『世帯安否確認表』『班内安否確認リスト』を記入する。

・訪問の過程で異常(倒壊、下敷き、怪我,出火)を発見したら、組情報リーダに連絡し、実働隊の出動を依頼する。

④出来上がった『班内安否確認リスト』を、組情報リーダに提出する。

その時、家屋の倒壊状況等から判断して、拠点避難世帯、在宅被災世帯の候補を選*『拠点避難者世帯状況票』と『在宅被災者世帯状況票』を作成*し、組情報リーダに提出。

⑤これらの作業が終わったら、減災センターに行き、組情報リーダからの要請・指示で、出来る範囲で、実働隊のサポートを行う。

⑥(2)の⑦と同じ。被災後3日間は、朝夕の被災状況を確認。停電後の通電時も安否確認。

(5)(自主防災)実働隊･･･救出･救護･消火

①～②は(1)と同じ。②は減災センターに行く。

③センター長の要請･指示に従い、減災センターの立ち上げの実作業を行う。

④センター立上後に、出動要請に備え、機材･機器･用具を点検･準備しておく。

⑤(3)の過程で発見された異常、(4)で報告された異常に対して、隊を編成して出動する。

･現地では、自分の身の安全を最優先に、『人的被害ゼロ』のスローガンのもと、出来る範囲で最大限の救出･救護･消火活動をする。

･出動後の現地の状況は、時々刻々センター長に報告し、必要なら増員要請する。

⑥(2)の⑦に対応して、実働隊も待機する。停電後の通電時は出動準備態勢で待機。

（公開版）　　被災時（訓練時）の住民（自治会会員）の行動マニュアル

平成 30 年4月　初版　　会長　河野　明

南笹野台では、被災時・訓練時の住民の行動マニュアルを下記の通り定める。

これは、訓練・被災時の住民の最低限の行動の原理原則を定めるもので、現実には臨機応変に自分と家族の実情に応じて行動して下さい。

被災時行動の原理原則
①まず、自分と自宅と家族の安全確保
②安全なら近隣と協力して地域の安全確保に協力
③結果として「火災と人的被害ゼロ」の町の実現

１・まず身の安全を確保して下さい。自宅で安全な場所は一般的には
①玄関か廊下（飛散する家具・置物が少ない場所）

２・安全性に問題がある場合は、落下物に気を付けて外に出て、助けを求めて下さい（下敷、怪我、火災、・・・）。
①自宅で火災が発生したら、消火器で初期消火を実施すると同時に「火事だ！」と大声で叫んで、近隣に助けを求めて下さい。
②自宅で、下敷・怪我が発生した時は、各戸確認訪問している班情報担当に助けを求めて下さい。

３・自宅の安全が確保できていれば、先ず下記を実施して下さい。
●停電していれば、ﾌﾞﾚｰｶを落して（感震ﾌﾞﾚｰｶ設置の家は自動断）
①道路から見える玄関等（階段下）に、「安全の黄色いタオル」と「消火器」を出して置いて下さい。
②訪問してくる班情報担当に、自宅の状況を報告して下さい。
③近所で火災があれば、班情報担当に協力して減災センターに報告すると同時に、出来る範囲で近所の「消火器を集めて」消火活動に参加して下さい。

４・３が終わったら、いっとき避難所（１組＝第３公園、２組＝南公園）に行き、いっときﾘｰﾀﾞから情報収集と被災情報を確認してください。

５・いっとき避難所では、４をすると同時に、いっときﾘｰﾀﾞから要請があれば、自分の出来る範囲で、減災センター（第 3 公園）に赴き自主防災実働隊（消火隊、救護隊、救出隊）の活動をサポートして下さい。

南笹野台では、自助として皆様に下記を提案しています。

①家具固定　②感震ﾌﾞﾚｰｶ設置　③５日分の備蓄品確保

以上

今回の目玉は①いっとき訓練の充実と②マンホールトイレのお披露目です

令和 ４年６月 20 日

南笹野台自治会会員各位　　会長　鈴木　秋彦［減災センター長］

南笹野台自治会　第７回減災訓練【安否確認訓練】（案）

令和 ４年７月１０日（日）実施のお知らせと参加のお願い

１．**実 施 日**　７月１０日（日）　午前 10：15～11：30 の間（目安）

〈 班長・前班長と班情報担当者（ビブス着用）が、安否確認(訓練)のため各家庭を訪ねます。ご参加下さい 〉

前班長も参加いただく事が今回の特徴

２．**実施内容：安全確保の為に、参加者は全員体温測定とマスク着用をお願いします。**

１）10：00　【発災】首都圏直下型地震発生、横浜市西部地区は M7.5、震度６と発表

２）10：00　●消火器がある家庭は、**消火器を玄関先**(道路から見える所)に供出下さい。

●当日ご参加頂く内容です。必ずご一読ください。

３）10：15　①余震は断続的に続くが、各家庭は冷静に行動を【共 助】に移す。

②減災センターの役員はビブスを着用し、自治会館に集合。(情報担当は除く)

【減災センター」を立上げる。自主防災実働隊出動準備。

【いっとき避難所」を立ち上げる。１組第三公園、２組南公園：　統括リーダー/副リーダー

＊情報・統括リーダー、自主防災実働隊隊長はトランシーバー携帯。

－③班長・前班長と班情報担当は、「班安否確認リスト」を携行し、各家庭を回り「班安否確認リスト」に基づき安否確認を行う。＊無事な家庭は門扉に黄色いタオルを掛ける。

*無事で余裕のある家庭は、いっとき避難所に集まる

④その状況を、班情報担当は、「班安否確認リスト」に記入する

－⑤班情報担当は、「班安否確認リスト」を自治会館に待機する情報副リーダーに届ける

（その後、班長/前班長共に「自主防災実働隊」と「いっとき避難所」の訓練を見学 / 参加する）

⑥各組の情報副リーダーは、届けられた「班安否確認リスト」を「組安否確認リスト」に集計し、「班安否確認リスト」と一緒に「減災センター」のセンター長（鈴木会長）に提出する。

★各家庭の皆さんは③の安否確認に対応して下さい。

★班長と班情報担当の方は、③～⑤を実行して下さい。

10：20【火災発生】２組の情報リーダーが２組 A 宅の火災を発見。無線により減災センターへ連絡。　【自主消火隊】　センター長は自主消火隊に出動要請。自主消火隊はスタンドパイプを搬送して出動、火災現場へ向かう。今宿消防署員指導のもと放水訓練を行う。　訓練状況をトランシーバーにより減災センターへ報告する。

５）10：25　【家具転倒によるけが人発生】１組情報リーダーが１組 B 宅で負傷者を発見。無線により減災センターへ連絡。センター長は自主救出隊、自主救護隊に出動要請。自主救出隊はリヤカー、担架等必要物資を持参、自主救護隊は救護バックを持参し出動。

【自主救出隊】

【自主救護隊】

「負傷者」の状況をトランシーバーにより減災センターへ連絡する。

負傷者救出後、第三公園にて救出隊と連携して、参加住民に救出/救護活動の説明をする。

６）10：30　「いっとき避難所の対応」は別紙に記載。多くの住民の「いっとき」参集をお願いします

⑦ １・２組の情報リーダーは、各組の被災状況を「いっとき避難所」統括リーダーに報告し減災センターへ合流する。統括リーダーは現場で訓練を行い状況をセンター長に報告する。

７）11：30　⑥～⑦の終了をもって、今回の訓練を終了とする。

８）11：40　減災センター運営委員会のメンバーと、自主防災実働隊の各隊長は,自治会館にて状況の確認､反省等を行う。　＜裏面参考資料あり＞　＜追加資料＞　是非､一読下さい。

住民の皆様の参加歓迎

留意

今回は２年ぶりの訓練なので、前班長も安否確認に参加し「訓練経験」を積んで頂きます。

令和４年７月　安否確認訓練時の「いっとき避難所」の対応

今年の安否確認訓練は、住民の皆さんの「いっとき避難所」への集結訓練とマンホールトイレ見学を追加し、いっとき統括リーダーの誘導で

①自治会で保有する防災機材で実施する訓練に見学・参加してもらう。

②自治会で新規導入したマンホールトイレのお披露目・説明にも参加。

注目

出来るだけ多くの方に「減災活動」をご理解頂く機会としたいと思います。

（お子様の参加も大歓迎：放水訓練、ロープワーク、ﾄﾗﾝｼｰﾊﾞ通信等を体験！

１０：００　被災―自宅の安全点検

１０：１５　*いっとき統括リーダー/副リーダー*

安否確認対応後にいっとき避難所にビブス/ヘルメット着用、ハンドマイク携行で行き、「いっとき表示」を掲げる。

１０：２０～　*安否確認対応終了した住民　＆　参加学童*　☛ここが例年と違います

余裕があれば、いっとき避難所に集まり、いっとき統括リーダーから訓練状況の報告を聞き、実働隊訓練の参加/見学の為の出動指示が出るまで待機する。

お子様の参加大歓迎

１０：３０　*情報リーダー：*　いっとき避難所の統括リーダーに、組の被災状況を報告し、減災ｾﾝﾀｰに合流する。

☛センター長/情報リーダー：マンホールトイレを設営する。

*情報担当：*安否確認終了後に、リストを携行してｾﾝﾀｰに行き情報副リーに報告。報告後は、そのまま第三公園で待機し、実働隊訓練に参加/見学。

☛当番情報担当：マンホールトイレ説明準備。

*班長・前班長：*安否確認終了後は、いっとき避難所に赴き、いっときリーダーの指示に従う。

*いっとき統括リーダー：*集まった住民からの被災状況ヒヤリングし、組情報リーダーの情報とあわせて組の被災情報を減災ｾﾝﾀｰにﾄﾗﾝｼｰﾊﾞで報告する（被災状況＆住民の集結状況）。減災ｾﾝﾀｰから報告される自治会全体の状況を集まった住民に知らせる。

１０：４０　*いっとき統括リーダー（住民の行動）*

減災ｾﾝﾀｰからの「要請通信」をﾄﾗﾝｼｰﾊﾞで受信。統括リーダーは「いっときに集まった人」を誘導し、各種訓練と体験の【見学ツアーに参加】する。

・次ページの「見学ツアー」に住民を誘導・引率する。

子供会および参加学童　☛ここも今回の目玉！！

・次ページの見学ツアーに参加し、手触り体験で「防災」を楽しむ。

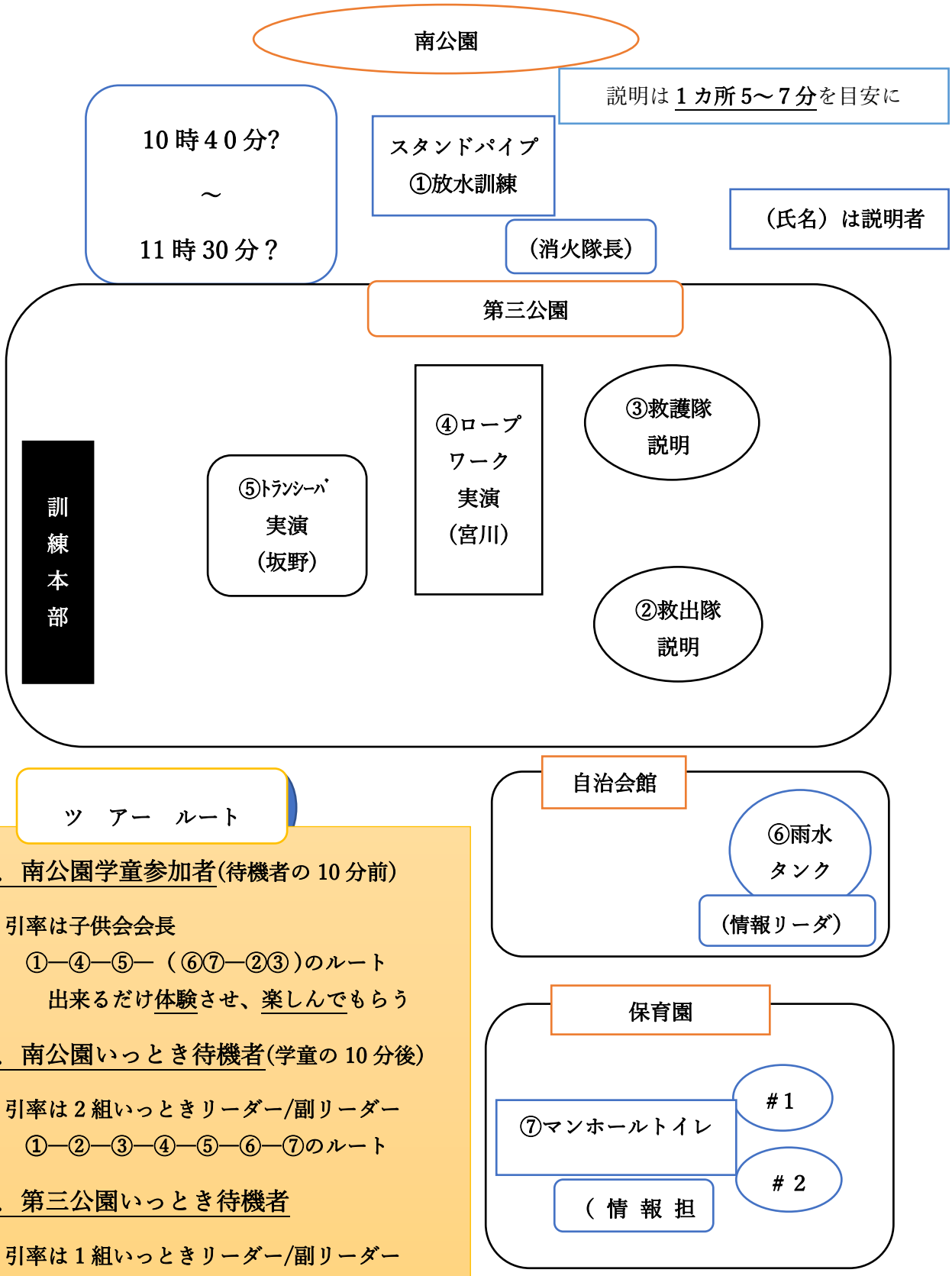
参加型訓練

▲マンホールトイレ展示現場にも誘導し、係の人から説明を聞く。⬅ 注目

１１：３０頃　訓練終了⇒解散

****次頁に今回の「目玉」の【参加型防災見学ツアー】の流れを添付します****

防　災（安　否　確　認）訓　練　の　見　学　ツ　ア　ー



ツ　アー　ルート

1. 南公園学童参加者(待機者の 10 分前)

引率は子供会会長

①―④―⑤―（⑥⑦―②③）のルート

出来るだけ体験させ、楽しんでもらう

2. 南公園いっとき待機者(学童の 10 分後)

引率は 2 組いっときリーダー/副リーダー

①―②―③―④―⑤―⑥―⑦のルート

3. 第三公園いっとき待機者

引率は 1 組いっときリーダー/副リーダー

⑦―⑥―⑤―④―③―②―①のルート

多人数なら⑤―④―③―②―⑥―⑦―①も

班内回覧資料

南笹野台自治会とキッズビレッジつくし保育園の防災連携

令和 3 年 11 月

自治会長　鐘木　秋彦

保育園長　大杉　美智子

掲記について南笹野台自治会（以降自治会）とキッズビレッジつくし保育園（以降保育園）は令和 3 年 10 月に防災に関する「連携協議書」を締結し、その一環として災害時に以下の6点で連携協力していく事を定めました。

①自治会が主催する「防災会議」や「防災訓練」に、保育園も可能な範囲で、参加・協力する。

②被災時にトイレが使えない事態が発生した時は、**屋外で防災活動に従事する人の為にマンホール型非常用トイレ**を双方で設営し、共同・共有して使用する。

そのため、双方は 1 台ずつ「マンホール型非常用トイレ」を保有する。

③被災時に下敷き事故等で心臓圧迫に陥った被害者を救護・救命する為に、保育園が保有する**「AED」を自治会も共用**使用する事が出来る。

④被災時家屋の崩落・半壊等で家に住めなくなった世帯に、指定避難所（笹野台小学校）が開設されるまでの短期間（1～2 泊）の**一時避難生活エリア**として、自治会と保育園は下記の 2 カ所を開放する。

☛自治会会館和室（1 世帯収容）

☛保育園共用スペース（1～2 世帯収容）

⑤被災時に「帰宅困難」世帯の**「孤立児童」を緊急預かりする「こども 110 番」**に保育園も登録しており、自治会の「110 番登録世帯」と同様に「孤立児童の救済」に保育園も参加する。

（首都直下地震では、東京で 517 万人の帰宅困難者の発生が想定されています）

⑥これらの連携協力の中で、自治会の**減災実働隊（消火・救出・救護）はその活動範囲を保育園も対象**とする。

以上、自治会と保育園は同じ町内会に存在する**「地域の仲間」として【防災連携】**をして、**被災時「人的被害ゼロ」の町**を目指して協力していきます。

以上

一時避難生活エリアの「運営規準(マニュアル)」　令和４年４月10日

検討メンバー：大城副会長、中田さん、大杉さん、稲盛副会長

１．いつ開設するか？　開設場所は？☛会館内に１世帯、保育園内に２世帯

震度５強以上で、家屋が崩壊/半壊して**家に住めなくなった世帯が発生する可能性**があると自治会長(=減災センター長)が判断した時に一時避難生活エリアは開設される。

２．開設期間

上記１で開設されるが、被災直後から地域避難所(笹小)が開設されるまでの**短期・一時的に開設**する（1～2泊でマックス３日程度を想定)。

３．誰が入所するのか？

家屋が危険な状況に陥り、**「家に住めない」世帯に限定**して受け入れる。南笹野台の家屋の耐震状況から、マックス３世帯分の生活エリアしか用意していない。

４．入所者は何を持参するのか?

一時避難生活エリアは、あくまでも**「雨露を凌ぐ」為の簡易生活エリア**で、備蓄品も最低限のモノしか用意していない。

開設時は、電気・ガス・水道・通信も途絶したインフラ全滅を想定しており、入所者は**最低限の生活備品は持参**するものとする。

①毛布　②冬季服装(あったか下着、ダウンジャケット、厚手靴下）　③非常食
④飲料水　⑤トイレパック　⑥常用薬　⑦懐中電灯　⑧その他

５．エリア開設責任者の設定

自治会長が任命する**エリア開設責任者（統括者１名、担当者2）**が開設時に下記を実施する。

☛「受付」「エリア準備」「入所心得の説明」を実施。
(入所心得は本WGでひな形を作る)　☛**「避難世帯情報カード」**を記入してもらう。
地域避難所(笹小)開設時、責任者が入所者を避難所まで誘導。上記カードを携行する。

６．エリアでの生活支援者の任命☛チェックリストは本WGで作成

自治会長が減災センター役員の中から、**交代対応する生活支援者**を任命する。

☛2人/1組一日４回入所者と面談し生活状況の把握と要望を聞き必要事項に対応する
(朝食：8時　昼食：12時　夕食：17時　就寝時21時の４回面談)

生活支援者は、**共通の「状況・チェックリスト」を持ち回り**、状況情報の共有を図る

7．入所者の食事

ガス・電気・水道が使えない前提で、**持ち込み（エリア備蓄）非常食での食事**となる。洗い物が出来ない環境なので、**食器も紙製**をサランラップで覆い**使い廻し**をする。

8. 入所者のトイレ

ケース１：水洗トイレが使える☛通常のトイレ生活
ケース２：水洗が使えない☛持参トイレパックで用便
ケース３：室内トイレ破壊・使用不可☛外部のマンホールトイレを使用
（「マンホールトイレ利用規約」に従う）

9. 入所者のごみ対応

通常生活と同じ分別ごみを実施、所定のごみ置き場に出す。
トイレパック汚物ごみは、黒色のトイレパック袋をそのままごみ収集場所に出す
他の汚物は、通常ゴミ分別収集に準拠する。

10. 自治会として備蓄するモノ☛下記の品物と数量を本 WG で具体化する。

☛備蓄品の在庫、ローリング、日干し等の管理担当者が必要

原則、入所者は自助・自活生活備品は持ち込みであるが、被災時**パニックで身一つの入居者もいることを想定**し、**下記の備蓄**を行う。

①毛布・寝袋：3 世帯 15 人分の寝具を備蓄。寝袋をベースに不足分は毛布を備蓄
（町内アンケートで毛布１０枚と 3 枚に布団の提供、寝袋 12 セット購入済）
☛寝具は年 2 回程度日干しで衛生管理を実施する。

②非常食：3 世帯 15 人 x3 日分の非常食を備蓄
☛ローリング食品は、バザー等のイベントの「非常食試食コーナー」に提供する

③飲料水：3 世帯 15 人ｘ 3 日分を 2ℓ ボトルで備蓄
(②③は紙コップ、紙皿にサランラップをかぶせて使い廻し、洗い物を出さない)

④トイレパック：3 世帯 15 人 x 3 日分で 60 パック購入・備蓄

⑤トイレペーパーロール：1 箱(12 ロール)を購入・備蓄

⑥消毒スプレー（ﾄｲﾚペーパに吹きかけ手洗い・消毒に使用）

⑦トイレ消臭剤、トイレ内に蓋つき汚物入れも用意

⑧懐中電灯（3 世帯=3 台）

⑨保育園入所世帯の間仕切り板

⑩携帯コンロとボンベ：3 セットを準備、防火に最大限の配慮の上で活用

⑪これらの備品の収蔵場所として**「防災倉庫」「会館押し入れ」を使用。**

以上

南笹野台「こども 110 番の災害時運用」マニュアル

首都直下地震では、帰宅困難者が、東京都内に 517 万人、横浜市内で 46 万人発生し家に帰れなくて被災現場にとどまる市民が膨大に発生する。南笹野台では帰宅困難で「保護者不在で孤立する学童」を緊急預かりで救済する「子ども 110 番の災害時運用」を制度化しています。

令和４年４月１０日

検討メンバー： 大野、土伊、子供会(中島、河島)、稲盛

１・事前準備

①110 番登録世帯に「災害時学童緊預かり」制度への参加意思確認

☛自治会が「110 番世帯」に意思確認アンケート：当該世帯は全員賛同！！！

②自治会で「学童の存在世帯」を「減災安心世帯情報」から抽出する。

☛①と②から「南笹野台自治会明細図（地図)」上に下記をマッピングする

・意志あり「110 番世帯」=ピンク色　　・学童存在世帯=水色

③マッピング情報を、当該 110 番世帯と当該学童世帯に、毎年配布する

☛当該学童の親は、被災時孤立した時に、どこの「110 番世帯」に行くのかを**日頃から親子で会話し確定**させ、当該の「110 番世帯」への道を確認しておく。

２・110 番世帯と当該学童の交流の場の設定

110 番世帯の人と当該学童は、顔見知りの関係になっていることが、孤立して不安に陥っている学童が、当該 110 番世帯へ安心して駆け込める最低条件となる。

そのため、**交流の場**を次の二つを用意する。

①顔合わせの場：毎年年度初めに、学童は当該の 110 番の家（出来れば 2～3 か所）を訪問し、対話を通じて顔見知りになる。令和 4 年はコロナ禍で中止。

子供会総会で、１②の地図を会員全世帯に配布する。

②町内イベント（「バザー」と「餅つき」）**で『110 番交流の席』**を設ける。

☛自治会は「110 番世帯」にイベントへの積極参加を呼び掛ける。

自治会も会報・回覧を通して、当該学童世帯に参加を呼び掛ける。

子供会も子供会加入「当該学童世帯」に交流の場への積極参加を呼び掛ける。

☛イベント当日は『110 番交流の席』で「食事」と「対話」を通じて交流する。

３・被災当日の行動

①110 番世帯は自宅が安全で「緊急学童受け入れ」が可能なら**『安全の黄色タオル』**を玄関の見やすい処(Ex 階段下)に掲げる。

②学童を緊急預かりした世帯は、遅れて帰宅する親御さんに知らしめる為に、黄色タオルの横に**「ピンクハンカチ」**を掲げる。ハンカチは自治会で事前配布する。

③孤立学童の行動：**親子で確認していた** 110 番世帯で黄色のハンカチを掲げた家を訪ね、保護してもらう。その際に学童は「〇組〇班の〇〇です」と名字を名乗る。

以上

自主防災活動事例写真

『南笹野台・30年の『町作り・絆作りイベント』

4月　老人会花見

6月　バザー

6月・11月　公園清掃

7月　夏祭り

１２月　餅つき大会

上記以外に５月「全戸減災アンケート」、７月「町内防災訓練」、10月「連合運動会」等
1年中『絆作り』イベントを開催

30 年以上毎年欠かさず上記のイベントを継続、さらに自治会内にソフトボールチームと女性陣の趣味の会が存在し、自治会活動を支えてきた。これらの伝統が「減災センター」の組織化や減災訓練の継続の源泉なっている。自治会加入率 95%もこの自治会の誇り。

南笹野台の減災練練　（毎年7月実施）

安否確認訓練：被災後30分が勝負!!

・黄色いタオル＝我が家は安全！　消火器：玄関前＝近隣小火に持寄り消火
・安否確認訪問は2人1組：安全性確保　・**いっとき**で避難所で情報交換

実働隊出動訓練

共助到着までは自分達で街を守る
：怪我人を救い町の火を消す

黄色いタオルと消火器玄関前

安否確認結果組別集計

怪我人救出搬送訓練

安心世帯情報をもとに戸別訪問

いっときに集まった住民

スタンドパイプ放水訓練

2019年7月27日　訓練風景がＴＶ朝日で全国放映された

この減災訓練では、安否確認に在宅世帯の 8 割以上が参加する。安否確認といっとき避難場所集結訓練と実働隊出動訓練を、同時並行で実施しﾄﾗﾝｼｰﾊﾞで通信して進行する。